

長野遺跡群

善光寺門前町跡(4)

—八幡屋磯五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

長野市教育委員会

長野遺跡群

善光寺門前町跡(4)

—八幡屋磯五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

長野市教育委員会

序

日本最古と伝わる一光三尊阿彌陀如来像、いわゆる善光寺如来像を本尊とする善光寺は、日本を代表する仏教寺院の一つであり、国宝に指定されている本堂をはじめ、重要文化財の三門・経藏など、境内には貴重な歴史的建造物が多数残されています。中世以降の浄土信仰や女人救済思想の影響、鎌倉幕府の保護、善光寺聖の勧進や出開帳などによって、「牛に引かれて善光寺詣り」「一生に一度は詣れ 善光寺」と言われるように、古来から多くの参拝客で賑わってきました。現在では、日本全国はもとより、海外からの観光客も増え、年間約600万人もの多くの老若男女が訪れるようになりました。

本書に所収しております善光寺門前町跡は、古くは古墳時代の遺構も見つかっていますが、中世以降に人・モノ・情報が集積する長野盆地の中核地として発展してきた門前町です。近年、観光客の賑わいに呼応するように参道の石畳化や周辺建物の建て替えなどの各種開発工事が増えつつあり、賑わいにますます拍車がかかっているようです。


このたび、平成19年に発掘調査を実施しました店舗の増築工事が行われることになり、開発業者との保護協議を経て、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。長野市の埋蔵文化財第142集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連絡と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対する深いご理解と発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました、開発業者である株式会社八幡屋鐵五郎の皆様、実際の作業にあたりご理解・ご協力を賜りました調査地近隣の皆様、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げます、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

2016(平成28)年3月

長野市教育委員会
教育長 近藤 守

例 言

1. 本書は、株式会社八幡屋磯五郎による八幡屋磯五郎大門町店増築工事に伴い、記録保存を目的として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査の実施に関しては、株式会社八幡屋磯五郎と長野市との間で協定及び委託契約を締結し、平成26年度に発掘作業、平成27年度に整理及び報告書作成を実施したものであり、業務は長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が履行した。
3. 発掘調査地籍は、長野市長野大門町86-1他で、起因となった開発事業面積178㎡全域を保護対象面積とし、そのうち133㎡を発掘調査対象面積として調査を実施し、実質調査面積は120㎡である。
4. 測量業務は株式会社写真測図研究所に委託した。本書の図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。
5. 本書に実測図を掲載した遺物は掲載番号を通し番号とし、金属製品についてはX線撮影の番号を別に付した。
6. 本書の編集執筆は飯島の指導の下、田中が担当した。遺構図整理・遺物整理・表作成・遺物写真撮影等は田中と向山純子で行った。
7. 本書図中に用いたトーンは以下の通りである。

8. 発掘調査で得られた諸資料は長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが保管している。なお遺跡略号は「NGYZ」としている。

目次

序文・例言・目次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯と調査経過	
第2節 調査体制	
第3節 調査日誌	
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第Ⅲ章 調査成果	8
第1節 調査概要	
第2節 遺構	
第3節 遺物	
第Ⅳ章 まとめ	13
報告書抄録・奥付	

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯と調査経過

善光寺の門前町一帯は、古くからの町屋としての町割りが残る歴史的な景観を見せている地域で、近年は街並み環境整備事業などによって石畳風道路や建物の美観化が進んでいる。中央通沿いに軒を並べる八幡屋磯五郎大門町店は、平成 19 年の店舗新築工事の際に発掘調査を実施しており、長野市の埋蔵文化財第 121 集として報告書が既に刊行されている。今回その店舗の増築工事が計画され、開発事業者である株式会社八幡屋磯五郎から埋蔵文化財の取り扱いに関する照会がなされたのは、平成 25 年 12 月 2 日に遡る。翌年 1 月 9 日に既存建物の解体工事の際に近世末期以前の遺物包含層を確認したことから、2 月 24 日付で文化財保護法第 93 条の規定に基づく届出が提出され、27 日付で保護措置として「発掘調査」を指示した。その後、保護協議を重ねる中で、平成 26 年度に現地における発掘作業を実施し、整理作業と報告書の刊行を平成 27 年度とする「埋蔵文化財発掘調査協定書」を 4 月 14 日に締結した。16 日付で平成 26 年度分の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、現地での発掘調査は 4 月 17 日から 6 月 3 日までの 48 日間実施した。平成 27 年度分は平成 27 年 4 月 6 日付で委託契約を締結し、整理調査を実施して本書を刊行した。

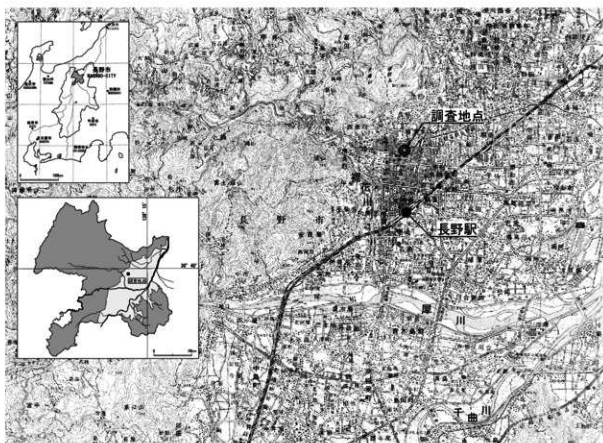


図 1 調査位置図 (S = 1/100,000)

第2節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直営事業として長野市埋蔵文化財センターが実施し、その組織は以下のとおりである。なお発掘調査に使用する大型重機・機材等は、事業者（調査依頼者）から提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	堀内征治（～H26.3）	近藤 守（H27.4～）
調査機関	文化財課	課長	青木和明	
	埋蔵文化財センター	所長	小山敏夫	
	庶務担当	係長	竹下今朝光	
		事務職員	大竹千春	
	調査担当	係長	飯島哲也（調査担当者）	
			風間栄一	
		主事	小林和子	
		専門員	柳生俊樹 高田亜紀子 田中曉徳（主任調査員）	
			遠藤恵美子 日下恵一 篠井ちひろ 清水竜太	
発掘作業員	伊藤咲子 江守久仁子 岡沢貴子 岡宮純子 駒村文男 杉本千代 諏訪里子 峯村茂治			
	村田岳仁			
遺構測量委託	株式会社 写真測図研究所			
石材鑑定	長野市立信州新町博物館	係長	轟山幸司	
X線写真撮影	長野県立歴史館			

発掘調査事業の委託者である株式会社八幡屋磯五郎におかれては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解に基づき、重機等の提供を含め円滑に調査事業を実施できるよう多大なるご配慮を賜った。整理作業においては長野県立歴史館 白沢 勝彦氏にX線写真撮影についてご指導を賜った。陶磁器・土器については長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏より御教示賜った。調査にご協力頂いた各位に記して厚く御礼申し上げます。



写真1 発掘作業に参加された皆さん

第3節 調査日誌

- 4月17日 器材搬入、重機による表土除去開始
22日 作業員による遺構検出開始
23日 1次面遺構検出状況撮影
24日 遺構調査開始
28日 1次面全景撮影
5月1日 遺構測量
7～13日 重機による包含層掘削開始、山留工・
汚水切回し等行う
14日 作業員による遺構検出、2次面遺構検出状況
撮影
15日 遺構調査
16日 2次面全景撮影、遺構測量
19日 重機による包含層掘削開始、山留工
20日 作業員による遺構検出
22日 3次面遺構検出状況撮影
23日 遺構調査開始、調査区内雨水除去のため沈
殿槽・水中ポンプ設置
30日 3次面全景撮影、遺構測量
6月2日 東調査区の重機による表土掘削、1・2次面調
査・測量
3日 2・3次面遺構調査・測量、器材撤収して調査
を終了



写真2 表土除去



写真3 作業風景(1)



写真4 作業風景(2)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

長野遺跡群は裾花川河岸段丘と湯福川扇状地による複合地形上に立地する。裾花川・湯福川はどちらも北西—南東方向の流路で、裾花川は現在の里島付近から小河川に分流していた。これらの川を古代から用水として利用していたのである。近世初頭に松城（後の松代城）城代花井吉成により現在の南下する河道に整備変更された。湯福川も宝永4年（1707）の善光寺本堂移転を機に現在の流路へと変更されたが、それ以前は図3にあるように旧本堂の北東を通る、直線的な流路であったと推定されている。湯福川扇状地は裾花川河岸段丘を覆って急傾斜をなし、調査地を含む善光寺門前町跡周辺においては北西から南東に傾斜している。地盤は岩塊をふくむ砂礫堆積で水はげがよく堅致である。周辺の発掘調査では、善光寺門前町形成以前から居住域として利用されていたことが確認され、生活に好適な環境であったと捉えられる。

善光寺周辺では善光寺とその門前町を形成・維持するため、地形の傾斜を水平に修正するための造成に大量の石塔類が使用され、火災後の整地などの地業も確認できる。弘化4年（1847）の火災による塵芥処理のため空閑地に埋設した例は調査の中で多く見受けられる。本調査地点も門前町の北端を東西に横切る横町通りに面しているが、通りに沿って弘化4年の火災に伴う廃棄土坑が検出された。当時の絵図等では調査地点が町屋地域に含まれることは確認できるが、具体的に空閑地であったかは不明である。近代においては参道に面して商店が並び、調査地点はその裏手にあたり、横町通りに沿ってやや東よりに小規模な店舗があったと想定される。調査区内においても地形の北西—南東方向への傾斜が見られ、北側を削平し南側に盛土を行っていたと見られる。また南北方向の石組水路が調査区の東西端にあり、調査範囲がおおよそ町屋1軒分の間口に当たるものと推測される。



図2 地形図 (S = 1/10000)

第2節 歴史的環境

調査地周辺では、大規模な調査として平成7・8年に国道406号線・市道県庁大門町線の道路拡幅に伴う発掘調査（西町遺跡・東町遺跡）および、関連事業として中央通りの歩道改修事業の工事立会が行われている。その後も店舗建築・増築など小面積の調査の蓄積により善光寺門前町の様相が次第に明らかになりつつある。

西町遺跡 縄文時代から現代に至る遺構を確認した。遺構の重複が激しく、縄文時代から古代の遺構は遺存状態が悪い。中世段階の遺構は大門地区に集中する。13世紀から15世紀後半に相当し、門前町形成に関わると考えられる遺構・遺物である。近世段階は、火災整地および近代以降の建築物基礎により破壊され残存状態は悪いが、門前町の商工業に関連する遺構・遺物を確認した。

東町遺跡 弥生時代から近世に至る遺構を確認した。弥生・古墳時代の遺構は湯福川の氾濫堆積に厚く覆われているため遺存度が高い。この氾濫堆積上に中世・近世面を確認した。

善光寺門前町跡 これまで竹風堂善光寺大門店地点（以下、竹風堂地点）・八幡屋磯五郎大門町店地点・店舗併用住宅地点で調査が行われた。いずれも善光寺参道に面した重要な位置にある。西町遺跡A地区で検出された溝SD1は竹風堂地点区画溝（SD1）と平行する位置関係にあり時期も同じ（13世紀後半）ことから当時、善光寺を中心とする一帯に土地整理事業が行われ、それは12世紀末の善光寺再興にともなうものであったと想定する。八幡屋磯五郎大門町店地点においても溝跡は検出されており、参道脇南北方向の溝である。時期としては14世紀～16世紀末と推定されている。店舗併用住宅地点では14世紀後半～近代の遺構が見られた。

元善町遺跡 近世以前の善光寺本堂推定範囲であるため、古代瓦の出土量は著しい。大本願明照殿地点では近江の湖東式瓦が出土している。本調査地点とは参道を挟んで近接し、古代～近代の遺跡である。

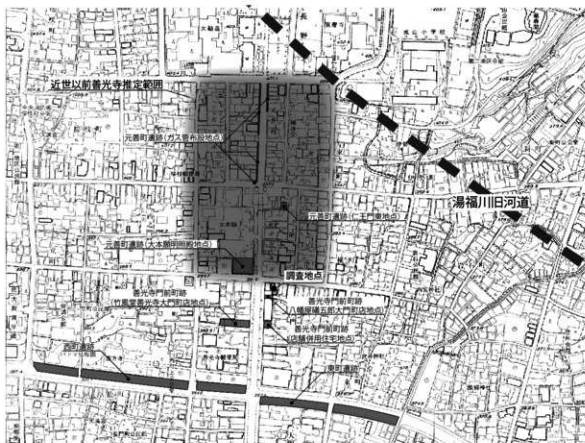


図3 周辺の遺跡と今回調査地点 (S=1/5000)

善光寺の成立

善光寺の僧職である「善光寺別当」が初めて文献史料に登場するのは1096年の記録（『後二条師通記』）である。それ以前の善光寺については『善光寺縁起』、平安時代の仏教説話集『僧妙達蘇生注記』等、本尊の様式、旧境内から出土した古代瓦から推測されるにすぎない。平安時代末期から中世にかけては極楽浄土の教えが広まった時代であり、11世紀末頃に中央の大寺院園城寺の末寺となった善光寺は阿彌陀信仰の聖地として次第に発展していった。しかし1179年、火災によって寺は消失し礎石を残すのみとなった（『吾妻鏡』）。1191年源頼朝の命により再建され、その後も時の権力者の庇護を受けた。戦国時代末期には上杉謙信・武田信玄が本尊を移したことにより一時衰退したが、江戸時代に入り再興された。元善町にあったそれまでの本堂が今の位置に造営されたのは1707年（宝永4）のことである。

門前町の成立

善光寺は、宝永4年（1707）までは今の元善町に本堂があり、県道豊野線は本堂に直行する参道であった。また、現本堂が位置しているところは北之門町があり、本堂の移転に伴って立ち退きとなった。このように、移転以前の善光寺門前町は、本堂を中心に東西南北の参道に沿って発達していたことがうかがえる。この景観は、参道に参詣者目当ての商人・職人が集住したのがはじまりであると考えられ、その後商業地として特化したものである。西町遺跡や門前町跡の発掘調査成果からは竪穴建物・陶磁器・渡来銭が出土し、門前町としての成立が13世紀『一遍上人絵詞』と一致することがわかる。『大塔物語』には応永6年（1399）信濃守護職に就いた小笠原長秀が、同7年（1400）善光寺に入り、国内に向けて指示を行ったことが描かれる。その際に「凡そ善光寺は、三国一の霊場にして（中略）門前に市をなし、堂上花の如く」道俗男女・貴賤上下でにぎわう様子が書かれている。

江戸時代に入ると北国街道の本格的な整備に伴い、善光寺宿には本陣が置かれ、大門町は旅館屋営業の特権を持つこととなる。18世紀に入る頃には参道の両脇に旅館が立ち並ぶようになる。文政10年（1827）に出版された『諸国道中商人鑑』中仙道・善光寺之部には、この他にも飲食店や薬・金細工・刀・呉服・茶など様々な店が掲載されており、大門町の繁昌ぶりがわかる。近代に入って、現在の国道403号線より北の参道、中央通沿いには23軒の商店が軒を連ね、銀行・書店・洋品店も出店している。この中で目立つのは洋品を扱う商店で、洋酒や煙草・ランプ・雑貨など様々で、近代の文化が善光寺の周辺にも波及していたのである。現在も江戸時代から続く老舗が残り、日本のみならず海外からの観光客が訪れて賑わいを見せている。



写真5 現在の門前町

西 暦	和 暦	善光寺・門前町に関する事象	時 代
9世紀後半		瓦葺きの建物が存在（善光寺前身寺か？）	平 安
1179	治承 3	火災により善光寺焼失（『吾妻鏡』）	
1187	文治 3	源頼朝が信濃国日代等に善光寺再興を命じる（『吾妻鏡』）	
1191	建久 2	善光寺再建落成（『吾妻鏡』）	鎌 倉
1268	文永 5	善光寺で火災（『栗田家記』）	
1313	正和 2	善光寺で火災（『立川年代記』）	
1370	応安 3	火災により善光寺全焼（『花宮三代記』）	室 町
1407	応永 14	宝塔再建（『三井統燈記』）	
1425	応永 32	火災により善光寺全焼（諸堂塔残らず焼失）（『看聞日記』）	
1427	応永 34	善光寺で火災（『王代記』）	
1474	文明 6	火災により如来堂焼失（『尋尊大僧正記』）	
1558	永祿 1	武田信玄が本尊を甲斐に移す（『甲州善光寺文書』）	
1597	慶長 2	豊臣秀吉が甲斐善光寺如来を京都方広寺大仏殿に移す（『甲斐善光寺文書』）	安土桃山
1598	慶長 3	本尊が信濃に戻される（『梵舟日記』）	
1599	慶長 4	豊臣秀頼が如来堂を再建（『当代記』）	
1601	慶長 6	徳川家康が善光寺に千石の領地を与える（大門町を含む）（『栗田文書』）	江 戸
1615	元和 1	落雷により本堂（如来堂）焼失、諸堂・寺中全焼（『御選座縁起』）	
1642	寛永 19	仮堂が焼失（『善光寺記録』）	
1650	慶安 3	如来堂仮堂を再建（『善光寺旧事見聞記』）	
1666	寛文 6	仮本堂（寛文如来堂）を再建	
1688	元禄 1	東之門町から出火、横町等焼失（『唐沢氏文書』）	
1692	元禄 5	本堂再建の為の出聞帳が寺社奉行より認可される（『如来三都御回国御聞帳日記』）	
1700	元禄 13	火災により再建中の本堂・焼失（『大勳進文書』）	
1705	宝永 2	西之門町より出火、大本願・三寺中・東之門町等焼失（『長野史料』）	
1707	宝永 4	本堂再建（『善光寺本堂建立由来留書』）	
1750	寛延 3	三門再建（『さざれ石』） 堂庭の販売商品について、大門町から訴えあり（『長野市史考』）	
1751	宝暦 1	西之門町より出火、大本願・町屋一帯1500軒を焼失（『観音堂縁起』）	
1759	宝暦 9	経藏落成（『別当伝略』）	
1830	天保 1	宿坊と大門町が旅客の宿泊について争う（『大勳進文書』）	
1846	弘化 3	大門町以外の宿屋営業を禁ずる（『長野市史考』）	
1847	弘化 4	善光寺地震により家屋3000戸、仁王門・大本願等焼失（『むし倉日記』）	
1864	元治 1	仁王門再建（『善光寺取調書』）	
1871	明治 4	上知令により善光寺領を中野県（のち長野県）に編入	近 代
1891	明治 24	5.24 東之門町から出火、伊勢町・岩石町・元善町焼失 6.2 上西之門より出火、仁王門・大本願・院坊・元善町等焼失	
1908	明治 41	本堂特別保護建造物に指定	
1918	大正 7	仁王門再建	
1953	昭和 28	本堂が国宝に指定	現 代
1965	昭和 40	三門・経藏が重要文化財に指定	

表 1 善光寺関連の年表

第三章 調査成果

第1節 調査概要

今回の発掘調査地は大門町東横町通りにあり、これまでの門前町跡の調査地点とは異なり、小路に面した敷地である。調査範囲は概ねL字形をしているが、通りに面した位置には以前は別の店舗があった。また東の張出し部分は地下室があったため、南半分は攪乱を受けていた。試掘調査の結果に基づき、遺構検出面を設定、重機で表土を除去し、その後遺構検出及び遺構掘り下げを人力で行った。検出した遺構の中で特に掘削深度の大きいものの、巨礫が混入するものについては作業上の安全面を考慮して未完掘である。遺構の記録保存について、遺構実測図作成に係る測量を株式会社写真測図研究所に業務委託し、調査員が現地で作図した。調査区東部分については平面図を平板測量により、作図した。遺構写真撮影は35mm一眼レフカメラ、モノクロネガ・リバーサルフィルムを用い、補助として一眼レフデジタルカメラを用いた。

基本層序は図4に示した。遺構確認面は3面を設定し、各面の地表面からの深度は1次面が約30cm、2次面が約50cm、3次面が約70cmである。出土遺物の年代に基づき、1次面は幕末～近代、2次面は18世紀代、3次面は中世・17世紀代と判断した。各層は黄灰あるいは暗褐色シルトで、焼土や炭化物・礫を含み、火災後の整地層と見られる。各層の年代に関しては、近接する元善町遺跡大本願明照殿地点の各遺構検出面の年代に対応することが判明した。

調査区内は近世～近現代の段階での変化が著しく、特に礫の取り扱いには苦慮した。礫について遺構が攪乱が極力現場で判断したが、報告書作成段階で各層の平面図照合により、建物基礎と確認できた。このため、建物跡1～3は遺構通し№を付していない。建物跡は掘削痕跡が明瞭でなく、出土遺物も僅少であるため、基礎構造を考慮して根石や造成が初めて確認された層を建物構築時期として捉えた。



図4 基本層序 (S=1/20)

第2節 遺構

(1) 1次面

幕末～近代に至る面で、遺構は南北方向の石組水路、石列1・2、石列3・4が検出された。長さ約50cm～1m程度の自然礫や整形した礫を用いている。善光寺周辺の町割も兼ねた水路には現在でもこの石組が見受けられる。調査範囲中央付近には構築年代が不明だが近代と見られる井戸があり、その北側に石組遺構1号遺構が検出された。1号遺構の、井戸と対応する位置には一部石組が欠けた部分があり、井戸と繋がる構造になっていて水場遺構である可能性がある。井戸の南には東西方向の石列があり、この石列は3次面まで同位置に見られる。3次面では遺存状態が良好なため、石列の端部から北へ延伸が見られ、それに対応する石列が北西にも検出されている。この石列は1次面で構築された倉庫や土蔵の根石であると考えられる(建物跡1)。また調査区西端には地下室の一部が検出され、調査区外へ続くと思われる。調査区北東隅には褐色土が充填された方形土坑65号遺構があり、

面	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形	覆土	時期	備考
1	1号遺構	(150)	128	60~65	方形	方形	単層	幕末以降	井戸に付属する水堀遺構か
1	2号遺構	44	28	12	楕円形	逆台形	単層		
1	3号遺構	56	48	16	楕円形	逆台形	単層	18世紀	肥前系染付・瀬戸・美濃系陶器
1	4号遺構	26	23	16	円形	方形	単層	18世紀	肥前系陶器・染付
1	5号遺構	34	33	38	円形	U字状	単層	18~19世紀	肥前系染付・産地不明型打成形陶器類
1	6号遺構	30	27	14	円形	U字状	単層		
1	63号遺構	318	172	106	方形	方形か	—	幕末以降	石砌土下室
1	建物跡 1	330	260	—	方形	—	—	—	建物基礎部石残存、石抜き取り痕
2	7号遺構	26	—	16	円形か	U字状	単層	17世紀後半	西壁セクションで検出
2	8号遺構	27	23	18	円形	U字状	単層	17世紀後半	
2	10号遺構	43	(1)21	13	楕円形	半円形	単層		
2	11号遺構	33	32	8	円形	半円形	単層		
2	12号遺構	58	34	16	楕円形	皿状	単層		
2	13号遺構	34	26	15	楕円形	U字状	単層		
2	14号遺構	27	(1)6	22	楕円形	U字状	単層		
2	15号遺構	32	22	22	方形	U字状	単層		
2	42号遺構	30	26	8	円形	U字状	—		
2	43号遺構	34	30	40	円形	有段皿状	底面に覆有		
2	44号遺構	22	19	44	楕円形	U字状	単層		土器皿
2	45号遺構	52	40	20	楕円形	U字状	単層		
2	46号遺構	34	29	33	円形	U字状	単層		
2	47号遺構	30	26	18	円形	U字状	柱敷有		土器皿・内耳鍋
2	48号遺構	22	22	28	円形	U字状	単層		
2	49号遺構	21	14	10	方形	方形	単層		
2	建物跡 2 (310)	220	—	—	方形	—	—	—	建物基礎部石残存、基礎内黄色砂入高埋積
3	66号遺構	90	47	10	円形	方形	単層		>30号遺構、調査時は15号遺構付替え、土器類
3	16号遺構	36	35	12	円形	U字状	レンズ状・覆層	15世紀	
3	17号遺構	32	27	15	楕円形	半円形	単層	15世紀	>28号遺構
3	18号遺構	20	18	31	円形	U字状	柱敷有	15世紀	>30号遺構
3	19号遺構	34	28	50	楕円形	皿状	単層		
3	20号遺構	26	24	12	円形	V字状	単層		
3	21号遺構	38	34	42	円形	U字状	単層		
3	22号遺構	44	36	26	円形	逆台形	単層	近世	
3	23号遺構	34	32	17	円形	U字状	単層	中世	
3	24号遺構	28	24	10	円形	逆台形	単層	中世	>32号遺構
3	25号遺構	90	88	21	円形	皿状	単層	15世紀後半	>30・31号遺構、土器皿
3	26号遺構	54	46	12	楕円形	皿状	単層		<28号遺構
3	27号遺構	36	34	20	円形	方形	単層		=28号遺構
3	28号遺構	216	20・30	12~16	L字溝状	方形	単層		=27号遺構
3	29号遺構	64	26	—	方形	皿状	単層		
3	30号遺構 (464)	50~78	12	溝状	弧状	単層		13~14世紀	<18・66・25・64号遺構、肥前陶器、手づくね土器皿、栗虫飯土器類
3	31号遺構 (232)	60	30	30	溝状	逆台形	単層	15世紀後半	<64号遺構、土器皿・瓦類
3	32号遺構	250	70~90	22~24	溝状	弧状	単層	17世紀	<24号遺構、古代瓦・肥前系陶器
3	33号遺構	60	30	8	楕円形	皿状	単層	中世	
3	34号遺構	24	26	8	円形	U字状	単層		
3	35号遺構	54	38	—	円形	U字状	単層		>40号遺構
3	36号遺構	26	22	26	円形	U字状	単層		
3	37号遺構	34	32	10	円形	半円形	単層		>28号遺構
3	38号遺構	36	34	10	円形	逆台形	単層		<37号遺構
3	39号遺構 (446)	(78~136)	40	溝状	弧状	単層		15世紀	<36・40・41号遺構
3	40号遺構 (550)	(130~250)	24	溝状	弧状	単層		15世紀	>39号遺構、<35・41号遺構
3	41号遺構 (286)	(110~180)	—	—	方形か	底面まで掘削不可	単層	17世紀	>39・40号遺構、土器皿・内耳鍋、肥前系染付・瀬戸・美濃系陶器類、京楽系陶器類など
3	50号遺構	65	51	15	方形	逆台形	底面に覆有	中世か	古代瓦・土器皿
3	51号遺構	110	96	13	円形	皿状	単層		
3	52号遺構	180	133	40	楕円形	皿状	レンズ状・覆層	17世紀前半	覆層
3	53号遺構	40	33	28	楕円形	U字状	単層	中世	土器皿
3	54号遺構	34	32	22	円形	U字状	単層	17世紀前半	
3	55号遺構	20	20	13	円形	U字状	柱敷有	中世	土器皿
3	56号遺構	30	26	18	円形	瀬戸状	柱敷有	中世	土器皿
3	57号遺構	31	38	29	楕円形	U字状	単層	中世	土器皿
3	58号遺構	44	38	14	楕円形	U字状	柱敷有		
3	59号遺構	28	22	—	楕円形	U字状	単層		
3	61号遺構	37	36	16	円形	U字状	単層		
3	63号遺構	56	55	28	円形	瀬戸状	単層		
3	64号遺構	58	48	12	楕円形	弧状	単層		>30・31号遺構
3	65号遺構 (248)	(170)	—	—	方形	底面まで掘削不可	単層	19世紀代	弘化4年(1847)火災の遺芥居埋れ赤褐色の覆土・熟焼により変色・変形した遺物
3	建物跡 3 (240)	250	—	—	方形	—	—	—	建物基礎部石残存、石抜き取り痕

表2 遺構観察表

出土遺物の年代より弘化4年(1847)の大火の廃棄土坑と考えられる。出土した陶磁器は被熱したものが多く釉薬の変色や変形が見られる。また被熱した壁材なども出土した。

(2) 2次面

遺構分布は少なく、ピットが見られる程度であるが、調査区西壁中央付近で、径約10cm、長さ80cm前後の先端を鋭利に切削した木杭が集中して打込まれている部分が見られた。削平された部分もあり、その全体を把握することは出来ないが、南北1.2m、東西80cmの範囲に32本の杭が打込まれ、そのうち数本は紐により束ねられていた。目的は不明なもの、捨杭などの基礎地業などが推測される。65号遺構の南には、東西3m、南北2.3m規模の、周囲と覆土が異なる範囲が検出された。南東部は1号遺構により削平されている。覆土はやや細粒の均質な黄色砂であり、人為堆積の可能性ある。何らかの建物跡と考えられ、建物跡2とした。

(3) 3次面

17世紀代の検出面であるが、中世の遺構も確認された。最も古いのは30号遺構で手づくね土器皿や土師器・須恵器が出土している。13～14世紀の遺構と判断した。南端に位置する溝状遺構39・40号遺構は15世紀代の所産である。出土遺物はほぼ同時期であるが、切合いにより39号遺構が古いと判断した。39号遺構は東西に走行し、調査区外に続く。恐らくは八幡屋磯五郎大門町店地点で検出されているSDO1に接続していたと思われる。遺構断面形は逆台形で部分的に北側に中場が設けられ、木杭列も見られた。40号遺構は北岸は調査されたが南岸は調査区外のため、全体を把握することは出来なかった。両者は17世紀代の性格不明遺構、41号遺構により削平されている。41号遺構は調査した範囲では方形を呈する遺構と推測されたが、非常に深く、湧水があったため完掘することが出来なかった。覆土からは17世紀前半を主体とする土器・陶磁器類、木製品・金属製品などが出土したが、15世紀代の遺物も含まれ、39・40号遺構の遺物が混入していると考えられる。建物跡の可能性を指摘しておく。52号遺構は長軸1.8m、短軸1.33m、深さ40cmの土坑である。焼土・炭化物を多量に含む。17世紀前半～半ばの年代の陶磁器が出土した。1号遺構の下層において東西方向の石列が確認された。32・33号遺構は石列北西隅に接続し、南下する位置にあり、根石が埋設されていたと見られ、建物基礎と判断した(建物跡3)。32号遺構からは17世紀前半の肥前系陶器皿が出土している。

第3節 遺物

(1) 概要

古代の遺物は中世・近世の遺構に混入して出土し、ほとんどが小破片である。

中世遺物の年代は15世紀代が主体である。土器では在地の皿・内耳鍋、陶磁器は国産陶器である古瀬戸・大瀬、中国産の青磁・白磁が出土した。また瓦器火鉢が3点出土しているが、竹風堂地点SK6でも出土しており、14世紀後半～15世紀の年代が示されている。土器皿は30号遺構で手づくね成形の製品が出土したが、他の土師器・須恵器とともに混入の可能性が高い。その他の土器皿はログロ成形で、出土遺構は39・40号遺構に集中している。

近世以降は17世紀～20世紀までの遺物が出土している。陶磁器に関しては、全体として安価な大量生産品が主体であり、碗の比率も多い。しかし、一般集落や町屋では使用しないような大皿や器高が25cmになる花瓶が出土している。また組と思われる同一製品も散見し、調査区の南西に位置する本陣や参道に面した店などで使用されていた什器の廃棄も考えられる。遺物の分類・編年については、肥前系陶磁器は大橋康二氏(九州陶磁学会2000)、瀬戸・美濃系陶磁器は藤澤良祐氏、美濃焼の一部については窯々根窯調査報告書(土岐市教委2006)、近

代瀬戸・美濃系陶磁器は長佐古真也氏、越中瀬戸焼は宮田進一氏の編年を参照した。

(2) 古代

30号遺構で土師器・須恵器の小片が出土しているほかは、造成土に混入していたと思われる古代瓦が見られる。

(3) 中世

土器皿 手づくね成形が30号遺構から出土している。このほかはほぼロクロ成形で回転糸切されている。しかし口縁～体部の整形方法は分類ができる。①ロクロナデで口縁が外傾するように整形するタイプ、②口縁部を強くするタイプ、③体部下半に横方向のケズリを施すタイプが出土している。これらロクロ成形の皿は器形などが15世紀代の特徴を示す。40号遺構では古瀬戸後期の天目碗・中国産白磁皿と共存している点で年代が一致している。

陶磁器 40号遺構出土の中国産白磁皿は口縁端反、見込に印花文が施されている。腐土出土の龍泉窯青磁碗も見込に印花文が見られ、いずれも15世紀代と見られる。40号遺構の天目碗は口縁のくびれがあまりなく、体部の開きも僅かに内湾する程度で、古瀬戸後期Ⅱ期、15世紀初めの製品である。3次面下層出土の83は体部内面に切込があるため卸皿と見られ、体部の直線的な器形、口縁端部の内面突出がない点で、古瀬戸中Ⅳ期の製品と考えられる。

瓦器 41号遺構出土の火鉢(121)は外面口縁付近にスタンプによる菊花文が施文されている。1号遺構からは2点の火鉢が出土しており、41もスタンプによる印花文が施文される。42は体下部に雷文が見られる。いずれも出土遺構は近世であるが、遺物の年代は中世後期と考えられる。しかし中世瓦器については奈良火鉢など広域流通品以外は胎土・色調・器形など形態が多様で、地域色も豊かである。このため分類・編年は未だ進んでいない。北信地域でも同様であり、現状では在地火鉢が普遍的に存在する中世後期としか限定できない。

(4) 近世

1～3次面を通じて、陶磁器が主体で皿・鉢が多いように見受けられる。10寸を超える大皿も出土しており、明らかに一般村落や町屋の陶磁器組成とは異なる。しかし18世紀の碗については肥前系佐佐見窯の大量生産品が出土している。19世紀以降は瀬戸・美濃系磁器染付が比率を高めていく。器種としては小杯や碗が多く、角皿や神酒徳利など多様化している。全時期を通じて産地は肥前系の比率が高いものの、瀬戸・美濃系製品が17世紀前半に定量を占め、確実に美濃焼と判明した製品もある(54)。19世紀以降には磁器製品において瀬戸・美濃系の比率が高くなる。3次面が17世紀前半の時期を含むため、越中瀬戸焼が出土している。肥前系とともに日本海流通と北信地域の関係性が窺える資料である。

特殊な器種としては1次面出土の25が挙げられる。底部のみなので推測であるが中国から輸入される薬の容器の可能性がある。2次面で出土した61は肥前系溝縁皿であるが、通常は62のように単独の皿として生産地から出荷されるが、61は2枚の皿が融着した状態である。掲載外の遺物だが、瀬戸・美濃系の磁器小杯に赤色顔料を入れたものが1号遺構から出土した。小杯は近代以降の製品であるが、赤色顔料の用途は不明である。60は2次面で出土した猪口で、幕末頃の製品である。底面に「するがや□□」という朱書がされている。朱書は焼成の際に焼締師が注文者名を記したものである。「するがや」については明治25年発行の『長野町勉強家一覧表』(図6)に広告が掲載されている。その広告によれば、するがや本店は「大門町上ノ角」とあり、支店は「横町大門ノ入口」とある。その表の他の部分に「大門町西側角ヨリ三軒目 するがや 鈴木小右衛門」



図6 長野町勉強家一覧

という広告も見られた。取扱商品が同じなので、同一店舗を指すのかもしれないが、不明である。いずれにしてもどのような経緯を経てか、するがやの所有品が廃棄されたのだろう。

41号遺構の123は中世の内耳鍋と比較して器高が低く、破片のため内耳の有無は確認できなかったが、共存遺物の年代である17世紀前半の所産と考えられる。

(5) その他

様々な遺物が出土しているが、瓦は近世の懸瓦が多い。古代瓦は出土したものの量は少なく、近接する大本願明照殿地点とは様相が異なる。恐らくは古代以前の遺構の有無によると思われる。155～158は磁器や珠洲焼・土器片の側面を打ち欠き円形に近い形状に作られている。用途は不明ながら、砥石に見られる研磨痕もないため、道具の可能性が高い。163は近代のガラス瓶であるが、無色透明・いかり肩という特徴は薬品瓶とされている（桜井2006）。気泡や底部の器厚の偏り（偏肉）は明治・大正期のガラス瓶に見られる特徴である。

石製品は石臼・五輪塔・宝篋印塔が出土した。これらの大型石製品は廃棄土坑と推測される41号遺構に投棄されていたり、石列に使用されていた。石臼は全て粉挽臼である。石塔は殆どが五輪塔であるが、171は宝篋印塔の中段の部位である塔身で、側面四方には金剛四界仏である「キリーク（不動明王）」「ウーン（阿闍如来）」「アク（不空成就如来）」「タラーク（宝生如来）」の種字が刻まれている。172も形状は宝篋印塔塔身であるが、四方に刻まれているのは全て「パン（大日如来）」の種字である。

金属製品は殆どX線撮影を行い、その63点中銭貨は23点である。寛永通寶が多く、中国銭の開元通寶や北宋銭の熙寧元寶・元祐通寶・至和通寶・天禧通寶が出土している。その他の金属製品は釘以外は不明なものが多く、家具や建具の部品と思われる。

木製品は湧水のあった41号遺構から出土した。何かの部材とは思われるが、掲載した2点以外は不明である。181は径24cm、厚さ0.8cmの曲物である。182も曲物で径14.8cm、厚さ1.2cmである。いずれも遺存状態は良くない。

第四章 まとめ

今回の調査は、善光寺門前町跡では今まで調査されていない、小路に面した敷地で行われた。いわば参道という門前町のメインストリートではなく、一般的な町屋が並ぶ範囲であり、これまでの参道沿いの調査との比較検討が期待できるものである。中世では15世紀代の遺構・遺物が確認され、39・40号遺構で出土した土器皿については、改めて八幡屋磯五郎大門町店地点SD01出土のものと比較検討した結果、製作技法・器形等が共通しており、同時期と判断した。中世後期の善光寺門前町の街並みについて、今回の調査で明らかにすることはできなかった。これまで西町遺跡では中世の溝跡や竪穴建物跡が発見されているが、その他の門前町跡の地点などでは区画溝が主な遺構となっている。今回の調査でも狭小な調査区であるために、遺構の性格を判断することが難しく、40号遺構については溝跡の可能性を指摘したのみである。

幕末以降の建物配置としては竹風堂地点と共通点がある。通りから奥まった位置に井戸があり、更に奥に土蔵などが見られる点である。本調査区も近代の井戸が通りからは離れており、その奥に建物跡が検出された。西隣の地下室は境界石組水路石列1・2を挟んでいるので、西隣の参道に面した敷地の施設と考えられるが、参道からは最も離れた位置になる。

出土した焼物は大量生産品を主体としながらも、径10寸を超える大皿や、17世紀前半には一般的な町人層が所有することが少ない器種である碗が見られ、この敷地の性格を考えるうえで重要な要素である。

各層は焼土・炭化物が多量に混入しているため、火災後の整地層であると推定される。各層の出土遺物の年代を調査地の所在する横町での火災の記録に照合すると、元禄元年(1688)横町などでの火災、宝暦元年(1751)大本願と町屋一帯の火災、弘化4年(1847)の善光寺地震とそれ後の火災があり、それぞれ3次面から1次面に時期が重なる。調査地が火災後の塵芥処理として利用された敷地であることも想定できるが、各層に建物跡が検出されているため、空閑地とは考えにくい。つまり出土した遺物はこの敷地に由来するものであって、また焼物の組成は一般的な町屋と評価することができず、むしろ参道沿いの店舗や旅館などの敷地と解釈することができる。図5は慶応4年(1868)に官軍が北に進軍する際、善光寺宿である大門町に宿泊する時の宿の配置図である。本陣と記載されているのは、現在も大門町にある藤屋ホテルで、位置もほとんど変化していないと推測される。図ではその右隣(北側)に「わたや仁左衛門」と記され、文政10年(1827)に出版された『諸国道中商人鑑』中仙道・善光寺之部には「わたや仁左衛門 二王門前東かハより三軒目」とあり、この配置が少なくとも40年前まで遡ることがわかる。絵図に調査地を正確に重ねることは、難しいが大門町の角から南2軒と東2軒が調査地に当たるのではないだろうか。大正14年の地図(図6)には御本陣であった藤屋ホテルの北隣に山田小間物店と見える。昭和27年に八幡屋磯五郎大門町店が outlets した位置であるので、今回の調査地はその隣の深沢洋品店とその東の丸田屋洋服店の位置であるのだろう。18世紀前半には藤屋が宿として大門町で開業しており、そのころに

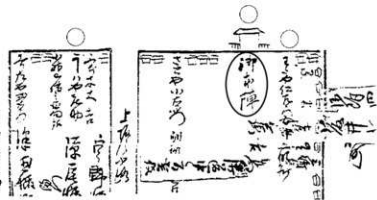


図5 小林計一郎 1994に加筆

は大門町の宿で本陣を持ち回りしていた。調査地はこれら宿の裏手や隣接する敷地であり、出土遺物に見られる傾向はこの立地に由来するであろう。

今回の調査では調査地の土地利用について、完全には解明できなかった。今後このような小路での調査事例が増加することにより、参道からでは分からない中近世の善光寺門前町が解明されることを期待したい。



図6 大正14年4月長野市略図並商業案内
(元善町誌編集委員会1980)に加筆

表3 出土器・陶器観察表(1)

図録No.	出土位置	種類	器種	保存率	法量(cm)	重量(g)	色調	胎土	輪葉	文様・その特徴	推定年代	備考
1	1号北平	陶器	皿	1/4	7.7	21.42	11.00	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	口縁部スス仕置	中世	唐中葉・中・古位近
2	1号北平	陶器	碗	1/3	10.7	7.5	4.6	144.71	黄褐色	底部下半部一高行露筋	不明	唐中葉・中・古位近
3	1号北平	陶器	碗	1/3	11.5	7.7	4.5	103.20	黄褐色	底部下半部一高行露筋	不明	唐中葉・中・古位近
4	1号北平	陶器	碗	底部1/1	—	66.3	5.1	135.12	黄褐色	無文	大福寺期(1650~1600)	
5	東1号	陶器	碗	底部1/1	—	49.8	5.3	135.19	黄褐色	無文	4・5・5小期(17C.3/4-4/4)	
6	東1号	陶器	碗	底部1/1	—	44.9	5.5	153.30	黄褐色	無文	4・5・5小期(17C.3/4-4/4)	
7	1号北平	陶器	碗	底部1/1	10.2	7.2	3.6	97.10	灰白・黄褐色	無文	大福寺期(1650~1670)	
8	1号北平	陶器	碗	体一底部2/3	—	4.3	4.2	87.94	灰白	無文	大福寺期(1650~1670)	
9	1号北平	陶器	小皿(深碗)	1/2	9.0	5.9	4.4	86.15	灰白	無文	大福寺期(1780~1810)	
10	1号北平	陶器	碗	完整	6.8	5.7	3.2	123.29	灰白	無文	大福寺期(1780~1810)	
11	1号北平	陶器	皿	1/3	13.2	3.6	4.9	49.54	にぶい・黄褐色	無文	大福寺期(1820~1860)	
12	1号北平	陶器	皿	底部1/4	11.2	4.0	—	21.81	にぶい・黄褐色	無文	大福寺期(17C.中)	
13	東1号	陶器	皿	底部3/4	—	62.8	5.0	60.13	にぶい・黄褐色	無文	大福寺期(1610~1650)	
14	東1号	陶器	皿	口一底部1/8	14.0	0.5	—	26.50	灰褐色	無文	5号・相模組2(17C.1/4-2/4)	
15	東1号	陶器	皿	1/4	11.8	2.4	6.8	30.20	灰白	無文	5号(17C.4/4)	
16	1号北平	陶器	紅陶(深碗)	1/3	6.2	2.5	3.6	294.3	灰褐色	無文	10・11小期(19C.2/4-3/4)	
17	1号北平	陶器	紅陶(深碗)	1/3	10.4	2.8	5.0	42.48	にぶい・黄褐色	無文	10・11小期(19C.2/4-3/4)	
18	東1号	陶器	鉢	体下半1/4	—	0.1	10.4	485.07	赤灰	無文	大福寺期(1780~)	片断
19	東1号	陶器	鉢	完整	—	0.1	10.4	485.07	赤灰	無文	大福寺期(1780~)	片断
20	1号北平	陶器	鉢	口縁部1/2	28.8	0.5	—	74.00	灰褐色	無文	大福寺期(1650~1660)	
21	1号北平	陶器	碗	底部1/2	—	66.3	13.4	285.63	黄褐色	無文	大福寺期(1650~1660)	
22	1号北平	白磁	鉢	底部1/2	—	62.8	3.9	35.60	白	口一縁部外縁部	近世	
23	1号北平	陶器	火入	口一縁部1/6	27.2	0.1	—	150.71	黄褐色	無文	19c.代	
24	1号北平	陶器	磁器	口一縁部1/12	11.7	0.7	—	55.63	灰白	無文	大福寺期(1650~1660)	
25	1号北平	青磁	瓶	底部1/1	—	62.7	2.2	18.44	灰白	青磁	大福寺期(1780~1800)	東川壺方
26	1号北平	磁器	神楽鉢	完整	1.6	7.3	2.4	46.68	白	口一縁部外縁部	中世	
27	1号北平	磁器	神楽鉢	1/2	1.7	7.5	2.7	32.79	白	口一縁部外縁部	19c.中一後半	
28	1号北平	白磁	神楽鉢	1/2	6.95	3.1	15.91	6	灰白	無文	19c.中一後半	
29	台11・29	磁器	碗	2/3	11.6	5.5	4.0	98.36	白	無文	大福寺期(1780~1800)	
30	台11・29	磁器	碗	体下半一	—	63.4	3.5	72.90	灰白	無文	大福寺期(1780~1800)	
31	台14	陶器	皿	1/3	12.5	5.1	5.1	68.15	黄褐色	無文	大福寺期(1650~1660)	
32	19号溝	陶器	四角深碗	1/3	7.9	8.2	—	41.58	灰白	無文	大福寺期(1650~1660)	
33	19号溝	磁器	鉢	体1/9	4.9	4	154.66	白	無文	無文	18c.後	
34	19号溝	磁器	小鉢	2/3	7.5	3.3	3.1	36.44	白	無文	大福寺期(1650~1660)	
35	19号溝	磁器	角皿	6/7	19.9	3.6	13.7	306.90	白	無文	大福寺期(1650~1660)	
36	19号溝	陶器	鉢	鉢	4/5	25.8	13.7	1667.70	にぶい・黄褐色	無文	大福寺期(1650~1660)	
37	19号溝	陶器	鉢	鉢	1/8	20.4	10.00	214.01	灰白	無文	大福寺期(1650~1660)	
38	19号溝	青磁	鉢	7/8	8.6	25.3	7.3	1052.70	黄褐色	無文	大福寺期(1650~1660)	
39	19号溝	磁器	油瓶	体下半一底部	—	44.9	5.2	1054.47	灰白	無文	大福寺期(1650~1660)	
40	19号溝	土器	磁方	口一縁部1/6	22	8.0	—	128.28	にぶい・黄褐色	無文	大福寺期(1650~1660)	
41	19号溝	瓦器	火筒(赤瓦)		14.3	7.2	7.4	124.96	内面外にぶい・黄褐色	無文	大福寺期(1650~1660)	

出土土器・陶磁器調査表(2)

館蔵 No.	山上位置	種別	器名	形状	現存率	口径	高さ	容量(g)	色調	胎土	胎重	文様・その特徴	推定年代	備考	
42	19号溝	瓦器	瓦器	底部1/6	—	65	18.3	205.70	紺色	にぶい焼白胎、褐色	外：黒文 内：黒文	在産	中世		
43	62号溝	土器	土器	1/8	100	2.3	6.3	17.18	にぶい焼	ロクロ成形、刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ-2期(1630~1650)		
44	62号溝	土器	土器	1/10	11	7.4	5.4	84.44	にぶい焼	刷毛目切、黒文	在産	中世	大塚Ⅱ-2期(1630~1650)		
45	62号溝	土器	土器	1/3	87	2.0	—	40.18	白	白ガク土質	在産	中世	大塚Ⅱ-1期(N19C.4.40)~ 2期(1/4期)		
46	62号溝	土器	土器	3/4	184	2.9	11.2	206.12	灰白	灰白土質	在産	中世	大塚Ⅱ期(白土1本~186期)		
47	62号溝	陶器	陶器	口縁1/12	229	6.8	—	54.03	刷毛目切	刷毛目切、刷毛目切	在産	中世	19A~		
48	65号溝	陶器	陶器	底部1/6	150	3.6	9.1	34.09	灰白	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1780~1800)		
49	65号溝	陶器	陶器	口縁1/4	—	49.8	17.2	410.51	灰	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1780~1800)		
50	65号溝	土器	土器	口縁1/4	106	6.9	—	91.12	灰白	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1780~1800)		
51	65号溝	土器	土器	底面	—	2.3	1.0	2.74	にぶい焼	刷毛目切	在産	中世	18A~18B		
52	65号溝	土器	土器	体下半	—	6.9	4.2	142.36	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ・Ⅲ期(1650~1780)		
53	65号溝	土器	土器	底部1/1	—	62.9	4.0	31.00	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1740~1770)		
54	65号溝	土器	土器	体下半	—	6.9	4.6	136.04	灰白	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1740~1770)		
55	65号溝	土器	土器	1/2	11.3	7.1	4.7	180.06	灰白	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1740~1770)		
56	65号溝	土器	土器	2/3	10.8	4.6	4.3	211.43	灰白	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1740~1770)		
57	65号溝	土器	土器	3/4	11.8	8.1	5.0	307.29	灰	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1740~1770)		
58	65号溝	土器	土器	3/4	11.4	7.1	4.7	348.37	灰	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1740~1770)		
59	62号	土器	土器	1/4	11.8	3.1	7.5	48.02	にぶい焼	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1780~1800)		
60	2号	陶器	陶器	口縁1/1	—	—	—	19.98	灰白	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1780~1800)		
61	62号	陶器	陶器	底部1/1	—	62	14.2	92.53	ネリノズル	上土質、刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
62	62号	陶器	陶器	底部1/3	11.2	2.1	3.8	75.24	ネリノズル	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
63	62号	土器	土器	不明	1/3	9.5	1.4	4.6	28.64	白	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)	
64	2・3号	土器	土器	1/4	8.0	2.2	4.2	13.78	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
65	2・3号	土器	土器	1/4	9.2	1.0	4.9	13.69	にぶい焼	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
66	2・3号	陶器	陶器	底部	—	14.4	4.9	113.37	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
67	2・3号	陶器	陶器	口縁部1/8	127	11.3	—	8.19	にぶい焼	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
68	2・3号	土器	土器	底部	—	5.8	1.3	62.14	灰白	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
69	3号	土器	土器	1/4	100	2.7	5.8	36.69	にぶい焼	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
70	63号	土器	土器	1/4	7.2	3.3	5.7	34.80	にぶい焼	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
71	3号	陶器	陶器	底部	—	14.4	4.6	95.96	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
72	3号	陶器	陶器	底部	—	14.4	5.0	100.97	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
73	3号	陶器	陶器	底部	—	14.3	4.8	78.50	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
74	3号	陶器	陶器	底部	—	14.0	4.6	68.94	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
75	3号	陶器	陶器	底部	—	8.1	4.8	34.32	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
76	3号	陶器	陶器	底部	—	14.3	3.4	94.78	刷毛目切	刷毛目切	在産	中世	大塚Ⅱ期(1620~1630)		
77	3号	陶器	陶器	底部	—	11.9	2.3	7.6	19.67	灰白	刷毛目切	在産	大塚Ⅱ期(1620~1630)		

出土土器・陶器観察表(3)

図号 No.	出土位置	種別	器種	模台番号	法相 ^(a)	重量(g)	色調	動上	施 装	文様・その他特徴	産地	推定年代	備 考
78	3階	陶器	皿	口幅1/4	口徑 器底 底径	— 50.32	—	—	—	—	肥前系	大槪前期650-1000	—
79	3階	陶器	皿	口幅1/2	— 65.29	107.41	—	—	—	—	肥前系	大槪前期650-1000	—
80	3階	陶器	皿	口幅1/3	138.3 32.56	107.75	—	—	—	—	肥前系	大槪前期650-1000	—
81	3階	陶器	皿	口幅1/3	107.3 3.58	68.47	—	—	—	—	肥前系	17c-14	—
82	3階	土器	皿	口幅1/3	143.2 8.60	81.47	—	—	—	—	肥前系	17c-14	—
83	3階下層	陶器	伊皿	口幅1/3	164.6 27.1	12.80	—	—	—	—	肥前系	大槪前期650-1000	—
84	7号遺構	陶器	碗	口幅1/2	117.6 9.46	112.81	—	—	—	—	肥前系	大槪前期650-1000	—
85	8号遺構	陶器	碗	口幅1/3	114.7 6.75	106.33	—	—	—	—	肥前系	大槪前期650-1000	—
86	25号遺構	土器	皿	口幅1/2	— (11)	17.29	—	—	—	—	在産	中世	—
87	30号遺構	土器	皿	口幅1/6	8.6 1.9	—	11.31	—	—	—	在産	中世	—
88	31号遺構	土器	皿	口幅1/4	9.4 2.5	6.1	18.81	—	—	—	在産	中世	—
89	31号遺構	瓦器	不明	不明	長60.0(器底) 3.6(底)	17.87	内装黒	—	—	—	在産	中世世	—
90	32号遺構	陶器	皿	口幅1/4	— 65.9	11.0	348.05	—	—	—	肥前系	大槪1・前期1500-1650	—
91	39号遺構西	土器	皿	口一断面1/6	7.7 1.9	4.2	6.48	—	—	—	在産	15c代	—
92	39号遺構西	土器	皿	口幅1/3	11.9 3.5	6.1	155.27	—	—	—	在産	15c代	—
93	39号遺構西	土器	皿	口幅1/8	11.3 2.2	7.0	12.76	—	—	—	在産	15c代	—
94	39号遺構西	土器	皿	口幅1/4	— 63.1	7.8	58.74	—	—	—	在産	15c代	—
95	39号遺構西	赤磁	碗	口幅1/4	— 63.0	4.4	43.27	—	—	—	肥前系	大槪1・2期1010-1650	—
96	39号遺構西	赤磁	碗	口幅1/2	— 62.9	4.7	80.04	—	—	—	肥前系	大槪1・2期1010-1650	—
97	39号遺構西	赤磁	碗	口幅1/10	— 62.9	11.4	262.31	—	—	—	肥前系	大槪1・2期1010-1650	—
98	39号遺構西	陶器	不明	不明	長77.4 2.29 10(底)	68.41	底	—	—	—	不明	不明	—
99	40号遺構西	土器	皿	口幅1/2	8.6 6.2	—	4.56	—	—	—	在産	15c代	—
100	40号遺構西	土器	皿	口幅1/8	5.4 2.1	3.5	5.85	—	—	—	在産	15c代	—
101	40号遺構西	土器	皿	口幅1/3	6.3 1.9	3.5	25.00	—	—	—	在産	15c代	—
102	40号遺構西	土器	皿	口幅1/3	6.2 2.1	3.1	25.17	—	—	—	在産	15c代	—
103	40号遺構西	土器	皿	口幅1/3	9.6 2.2	7.0	28.07	—	—	—	在産	15c代	—
104	40号遺構西	土器	皿	口幅1/3	12.4 3.4	9.4	20.47	—	—	—	在産	15c代	—
105	40号遺構西	土器	皿	口幅1/3	12.2 3.3	7.7	34.20	—	—	—	在産	15c代	—
106	40号遺構西	土器	皿	口幅1/3	12.2 3.3	7.7	34.20	—	—	—	在産	15c代	—
107	40号遺構西	土器	皿	口幅1/3	12.2 3.3	8.0	41.57	—	—	—	在産	15c代	—
108	40号遺構西	土器	大皿	口幅1/10	12.0 6.6	8.9	41.57	—	—	—	在産	15c代	—
109	40号遺構西	土器	皿	口幅1/3	12.2 3.0	5.2	56.00	—	—	—	肥前系	大槪1・2期1010-1650	—
110	41号遺構西	土器	皿	口幅1/4	— 62.0	6.0	58.24	—	—	—	在産	15c代	—
111	41号遺構西	土器	皿	口幅1/4	— 62.0	6.4	38.93	—	—	—	在産	15c代	—
112	41号遺構東	土器	皿	口幅1/6	9.0 2.4	6.0	88.28	—	—	—	在産	15c代	—
113	41号遺構東	土器	皿	口幅1/6	7.8 1.8	6.0	56.31	—	—	—	在産	15c代	—
114	41号遺構東	土器	皿	口幅1/3	8.5 2.6	5.4	16.12	—	—	—	在産	15c代	—
115	41号遺構東	土器	皿	口幅1/3	11.5 7.9	5.0	173.30	—	—	—	肥前系	大槪前期1050-1000	—
116	41号遺構東	陶器	皿	口幅1/3	34.8 10.1	10.6	42.16	—	—	—	肥前系	大槪前期1050-1000	—
117	41号遺構西	陶器	皿	口幅1/3	13.9 3.5	3.9	107.38	—	—	—	肥前系	大槪前期1050-1000	—
118	41号遺構西	陶器	皿	口幅1/3	13.9 3.5	3.9	86.28	—	—	—	肥前系	大槪前期1050-1000	—
119	41号遺構西	陶器	大皿	口幅1/12	23.0 4.9	6.4	34.00	—	—	—	肥前系	大槪前期1050-1000	—

出土土器・陶器観察表(4)

観測 No.	出土位置	種別	器種	製作率	法線(%)	重量(g)	色調	胎土	施 装	特 徴	文様・その他特徴	埋定地	埋定年代	備 考
120	41号遺構西	瓦器	瓦片	口幅1/6 13.7	底径 6.7	—	灰口	明瓦黒胎白化粧黒色化粧	口縁部黒胎	内面黒胎	口縁部黒胎・スタンプ押花文	肥前系	大塚前期(650~1000)	
121	41号遺構西	瓦器	瓦片	口幅1/2 20.0	底径 6.0	—	灰質	灰胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	内外スズ付着
122	41号遺構西	土器	内山皿	口幅1/2 24.8	底径 14.4	—	43.21 黒	内山系赤胎 内山形	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	
123	41号遺構西	土器	内山皿	口幅1/6 30.0	底径 8.1	28.3	190.66 内山系赤胎	明瓦赤胎白化粧黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	
124	41号遺構西	土器	内山皿	口幅1/6 29.0	底径 8.1	—	7.52 黒	明瓦赤胎白化粧黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	
125	52号遺構	土器	皿	口幅1/6 7.0	底径 2.1	4.7	10.3 赤胎	赤胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	
126	52号遺構	土器	皿	口幅1/6 10.9	底径 3.9	—	13.22 灰口	灰胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	
127	52号遺構	土器	皿	口幅1/4 —	底径 4.8	7.5	76.27 灰口	灰胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	
128	52号遺構	土器	皿	口幅1/2 —	底径 6.4	23.27	灰口	灰胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	
130	52号遺構	土器	鉢鉢	1/2 33.8	底径 13.0	120.60	黒胎	和赤胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	大塚前期(650~1000)	
131	52号遺構	土器	皿	口幅1/4 7.6	底径 7.8	10.3	120.64 内山系赤胎	明瓦赤胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	大塚前期(650~1000)	
132	52号遺構	土器	皿	口幅1/4 10.2	底径 6.9	—	116.14 内山系赤胎	明瓦赤胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	大塚前期(650~1000)	
133	54号遺構	陶器	天目鉢	口幅1/6 13.1	底径 4.9	—	20.23 黒胎	灰口胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	内面黒胎状態
134	2・300下 2・300上	陶器	丸盤	2/3 8.8	底径 4.9	3.4	110.70 灰口	灰口胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	肥前系	大塚V期(1780~1810)	
135	2・300下	陶器	皿	1/5 9.8	底径 3.1	3.7	20.33 灰口	灰口胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	肥前系	大塚II~IV期(650~1780)	
136	2・300下	土器	皿	底径1/1 —	底径 4.7	4.7	35.82 赤	和口色胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	不明	
137	2・300南西	陶器	鉢	底径 —	底径 0.1	4.2	94.36 黒胎	黄胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	肥前系	大塚前期(650~1000)	
138	300トレンチ	土器	皿	1/4 10.8	底径 3.0	5.4	25.80 成焼赤胎	成焼赤胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	15c代	
139	300トレンチ	土器	鉢カ	口幅1/8 22.1	底径 11.2	—	145.11 成焼赤胎	成焼赤胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	不明	不明	
140	南トレンチ	土器	鉢	口幅1/8 24.6	底径 17.4	—	123.75 成焼赤胎	成焼赤胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	在池	不明	内面スズ付着
141	トレンチ	陶器	不明小片	—	—	—	2.60 成焼赤胎	成焼赤胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	口縁部黒胎	不明	不明	外底黒胎
142	南上	陶器	底	底径 16.7	底径 5.7	2.2	5.5	176.17 明オリウズ灰	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	能登系	15c代	不明
143	南上	陶器	底	底径 7/8	底径 10.8	6.2	3.7	150.66 白	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	能登系	15c代	不明
144	南上	陶器	筒形器	2/3 5.0	底径 5.6	2.9	63.19 白	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	能登系	15c代	不明
145	南上	陶器	西蓋	13/16 5.1	底径 3.0	1.9	27.72 白	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	能登系	15c代	不明
146	南上	陶器	多角皿	1/4 11.3	底径 2.8	4.6	30.74 白	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	能登系	15c代	不明
147	南上	陶器	鉢	口幅1/6 17.2	底径 4.2	—	369.50 灰口	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	能登系	大塚V期(1780~1800)	黒胎
148	南上	陶器	水注	1/2 3.5	底径 8.1	6.0	118.89 黒胎	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	不明	不明	
149	試掘	陶器	光雲	口幅1/10 2.7	底径 0.8	—	117.40 黒色	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	成焼赤胎	能登系	15c代	不明

表4 石製品観察表

石目(A:外径B:器高C:中心高)・石積(A:口部B:タテC:ヨコ)・金属製品(A:長さB:幅C:厚さ)

観測No.	出土位置	分類	石材	法量(mm)			重量(g)	残存率	備考
				A	B	C			
164	石列1・2	粉焼白	安山岩	37.2	12.2	5.2	13.30	1/2	上白6分焼左回し・磨方打込み後手穴中央穴貫通
165	石列1・2	粉焼白	安山岩	34.5	13.4	6.7	15.40	1/2強	上白左回し・磨方打込み後手穴中央穴貫通磨減激しい
166	41号遺構東平	粉焼白	安山岩	32.4	10.6	5.8	7.25	1/2	下白6分焼左回し
167	2・3次面南トレンチ	粉焼白	安山岩	30.0	8.8	1.9	3.75	1/3	上白6分焼左回し・磨方打込み後手穴中央穴貫通
168	52号遺構	硃石	頁岩	5.9	(9.7)	19.7	263.19g	不明	磨方角隅状粗多・割削片3次面輪切と接合
169	3次面トレンチ	硃石	頁岩	6.1	1.6	(9.3)	140.45g	不明	
170	52号遺構	硃石	輝石	4.5	2.0	(4.0)	14.43g	不明	浅助山磨方カ
171	石列1・2	宝渡印南	安山岩	15.0	13.6	15.5	5.40	4/5	磨身・4面に梵字「金剛四西方仏」
172	南隆石列	宝渡印南	安山岩	15.3	12.0	15.0	5.35	ほぼ完形	磨身・4面に梵字「フシ(大日如來)」
—	石列1・2	五輪塔	安山岩	25.6	15.0	25.0	12.80	1/1	火輪
—	石列1・2	五輪塔	安山岩	21.7	13.0	22.0	7.85	ほぼ完形	火輪
—	41号遺構東平	五輪塔	安山岩	15.6	19.5	13.1	5.10	1/1	空輪
—	41号遺構東平	五輪塔	安山岩	24.7	16.2	24.4	10.40	4/5	火輪一部磨減
—	41号遺構東平	五輪塔	安山岩	15.1	17.6	(11.9)	2.05	3/4	空輪輪縁・輪縁に凹有
—	41号遺構東平	粉焼白	安山岩	(13.4)	9.5	6.5	2.60	1/4	上白6分焼左回し・磨方打込み後手穴中央穴貫通
—	41号遺構東平	五輪塔	安山岩	(9.8)	(12.4)	10.4	1.25	4/5	空輪輪縁に凹有
—	南隆石列	五輪塔	安山岩	12.6	15.1	—	7.10	ほぼ完形	水輪・上部中央に凹有
—	2・3次面南トレンチ	五輪塔	安山岩	19.5	10.5	19.7	5.90	ほぼ完形	火輪一部磨減
—	2・3次面南トレンチ	石塔カ	安山岩	21.0	15.7	14.5	8.25	不明	小片のため分類不明
—	2・3次面南トレンチ	五輪塔	安山岩	19.4	13.3	—	7.10	ほぼ完形	水輪・上部中央に浅い凹有
—	トレンチ	五輪塔	安山岩	13.2	12.6	—	2.57	4/5	空輪輪縁に浅い凹有
—	東2次面	五輪塔	安山岩	23.5	14.2	22.8	8.65	7/8	火輪
—	東2次面	五輪塔	安山岩	22.2	12.9	21.5	8.05	ほぼ完形	火輪・輪縁部に小穴有
—	東3次面	五輪塔	安山岩	20.8	15.1	20.0	11.50	ほぼ完形	地輪・下部中央に浅い凹有

表5 金属製品観察表(1)

A:長さ・外径・B:幅・内径・C:厚さ

観測No.	出土位置	分類	材質	法量(mm)			重量(g)	残存率	備考	観測No.
				A	B	C				
62	号遺構	釘	鉄	(29.1)	5.1	4.3	2.03			1
62	号遺構	釘	鉄	(35.5)	5.5	5.5	2.32			2
1	号遺構	鉄貨		28.3	6.2~10.3	1.3	4.96	完形	新嘗水遣費4文銭1768年~	6
1	号遺構	鉄貨		22.9	5.9	1.3	2.76	完形	新嘗水遣費1文銭1668年~	7
1	号遺構	不明	鉄	17.2	2.2~5.3	1.4~5.6	25.55	完形		9
173	1号遺構	不明	鉄	125	5.3~7.0	5.5~11.2	18.30	完形	片端磨状	10
1	号遺構	新釘	鉄	85.5	7.7~15.3	12.0~16.0	27.13			11
174	1号遺構	不明	鉄	61.9	6.3~10.9	5.8~7.8	15.18		片端磨状	12
1	号遺構	鉄貨		21.7	6.1	1.2	2.38	完形	新嘗水遣費1文銭1668年~	13
1	号遺構	鉄貨		23.6	5.7	1.7	1.66	1/2	新嘗水遣費カ1文銭1668年~	14
175	4号遺構	新釘	鉄	35.9	3.0~11.1	2.0~8.7	4.17			15
176	32号遺構	新釘	鉄	101.3	13.8	12.9	23.31			16
177	33号遺構	不明	鉄	105.4	5.3~13.6	5.3~20.9	6.57			17
41	号遺構	不明		91	16.8	7.4	22.15		中央孔あり	18
41	号遺構	鉄貨		24.5	5.5	1.4	3.51	完形	古嘗水遣費1文銭1636~1656年	19
41	号遺構	鉄貨		24.5	6.8	1.2	2.58	完形	黒紫元寶・貞豊・北条1068年	20
178	41号遺構	銅合貝カ		64.1	33.6	2.1	6.57		3カ所留め孔・孔の敷からは本家カ所で固定	21
52	号遺構	不明	鉄	(58.6)	12.4	6.1	9.15		磨状	22
52	号遺構	鉄貨		23.3	6.5	1.2	2.47	完形	新嘗水遣費1文銭1668年~	23
60	号遺構	不明	鉄	109	3.4~7.4	2.5~8.2	12.40			25
1次	面	鉄貨		24.8	6.5	1.2	1.52	完形	開元通寶・唐621年~	26
1次	面	鉄貨		24.5	5.8	1.5	3.20	完形	元元通寶・唐北宋1068年~	27
179	1次面	不明	銅	11	6.6	0.7	0.56		楕円・裏面凹有	28
1次	面	不明	鉄	143	4.2~10.4	6.1~9.3	49.35		磨状	30
2次	面	不明	鉄	68.1	2.7~7.3	3.7~9.5	4.14			32
2次	面	北平	釘	58.6	3.3~5.8	2.6~5.8	5.28			33
180	3次面	銅貨	銅	74.2	8.7	3.6	8.89	完形	順口118と後半以降	35
3次	面	鉄貨		23.6	7.2	1.1	2.42	完形	開元通寶・唐621年~	36
3次	面	鉄貨		22.2	6.9	1.0	2.14	完形	寛永通寶1文銭	37
3次	面	鉄貨		24.8	7.1	1.3	3.92	完形	元和通寶・貞豊・北条1054年~	39
南西トレンチ2面トレンチ	不明	鉄		(85.5)	8.9	6.2	11.32			41
北トレンチ2面トレンチ	不明	鉄		(150)	13.7	2	17.56			42
木柱側	鉄貨			28.3	6	1.5	4.62	完形	新嘗水遣費4文銭・貞11世1768年~	43
木柱側	鉄貨			23.7	6.1	1.3	2.98	完形	新嘗水遣費1文銭1668年~	44
木柱側	鉄貨			25.3	5.2	2.4	3.13	完形	新嘗水遣費1文銭1668年~	45
木柱側	鉄貨			24.7	6.9	1.1	1.46	完形	新嘗水遣費1文銭1668年~	46
3次面トレンチ	鉄貨			22.5	7.1	1.0	1.53	完形	新嘗水遣費1文銭1668年~	47
東1次面	不明	銅		43.2	1.7~3.7	1.1~4.4	1.92		中央付足3条の沈積カ	52

金属製品観察表(2)

A長さ・B幅・C厚さ

掲載No.	出土位置	分類	材質	法量(mm)			重量(g)	残存率	備考	撮影No.
				A	B	C				
1	第1次面	鉄貨		25.5	6.7	1.2	3.58	完形	天沼遺跡・北宋1017年～	
2	第1次面	鉄貨		25.7	4.9	2.2	4.11	完形	古寛永通寶1文銭1636～1656年	54
3	第1次面	鉄貨		25.5	3.6	2.9	3.50	完形	古寛永通寶1文銭1636～1656年	55
4	地盤	打カ	鉄	38.2	7.3～10.4	4.4	4.29			57
5	南土	鉄貨		28.2	6.2	1.4	5.10	完形	新寛永通寶4文銭・貞1説1768年～	59
6	南土	鉄貨		2.4	6.5	1.3	2.73	完形	新寛永通寶1文銭1668年～	60
7	試掘	鉄貨		28	7.1	1.3	4.10	完形	新寛永通寶4文銭・貞1説1768年～	61
8	試掘	鉄貨		28	7.1	1.3	4.10	完形	新寛永通寶4文銭・貞1説1768年～	63

表6 瓦・土製品・ガラス観察表

掲載No.	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm)		重量(g)	色調	胎土	備考	
					長さ	幅					
150	32号遺構	古代瓦	平瓦	小片	100	12.5	2.3	401.72	緑灰	小礫・赤色粒・砂粒	凸面端目印さ・凹面布目痕・端部面取
151	52号遺構	古代瓦	平瓦	小片	8.8	8.0	1.9	176.27	橙	長石・赤色粒	凸面端目印さ・凹面布目痕・端部面取
152	1号遺構	古瓦	軒平瓦	瓦当片	100	12.5	2.3	167.37	緑灰	灰・赤色粒・白色粒・小礫	瓦当取付・凹面布目痕・端部面取
153	52号遺構	瓦	破石	小片	5.8	3.0	1.7	55.60	緑灰	黒灰・黒色粒	転用破石
154	南土レンヂ	土製品	瓶口		9.4	径8.1	孔径2.7～3.4	379.70	にぶ・黄緑	灰白・黄緑	外縁下方十字ノデ口被跡により黒色化・鉄滓付着
155	41号遺構	磁器	碗	片	2.0	1.9	0.65	3.34	灰白	灰白・糖良	染付・乳白・外周打ち欠き転用
156	3次面	土器	伝瓦	不明	3.5	3.0	0.75	9.49	灰緑	にぶ・砂・砂粒	外縁全打ち欠き転用
157	41号遺構	珠・陶	不明	完形	4.6	4.2	1.5	35.02	灰	灰・白色粒・鉄物質	外周平打り・外周打ち欠き転用
158	39号遺構	瓦	不明	完形	5.8	5.4	2.0	68.52	緑灰	灰・糖・粗	外周打ち欠き転用
159	石明1・2	土製品	碁石	完形	—	径2.65	0.65	2.33	灰黄	—	—
160	陶瓦	土製品	碁石	完形	—	径2.15	0.5	3.16	灰白	—	—
161	1次面	ガラス製品	おぼじき	完形	—	径1.65	0.5	2.03	淡緑	—	透明・気泡伸長
162	2・3次トレンヂ	ガラス製品	おぼじき	完形	—	径1.4	0.2～0.35	1.11	青紫	—	上面中央部形跡のみ・透明・気泡極小
163	陶瓦	ガラス製品	瓶	完形	口径2.1	瓶高7.4	底径2.8	39.48	透明	—	使用用・断面に合わせ目あり・気泡・底面編み

表7 掲載外土器・陶磁器観察表

出土位置	種別	鑑定産地	器種・点数
1次面	土器	在池	皿6・内口皿5・火鉢1・不明8
			肥前系 碗18・皿5・蓋1・器鉢4・袋物1
	陶器	瀬戸美濃系	碗29・皿1・器鉢3・鉢1・袋物4・不明12
			不明
			器鉢1・急須4・不明1
	磁器	肥前系	皿2
			碗59・小杯3・皿10・鉢2・蓋2・袋物9・不明14
	青磁	不明	瀬戸美濃系 碗8・皿1・器物2・香炉1
			急須3・不明2
	瓦	在池	古代瓦1
肥前系 鉢2・蓋2・香炉1			
2次面	土器	在池	皿41・内口皿3・鉢6・不明1
			肥前系 碗3・鉢1
	陶器	瀬戸美濃系	碗6・皿2・鉢1
			不明 不明1・不明1・袋物2
	磁器	肥前系	碗8・小杯1・皿1・鉢1・鉢2・袋物1・香爐香炉1
			瀬戸美濃系 碗9・皿1・鉢2・袋物1・不明12
瓦	不明	火鉢1	
		急須	
2・3次面	土器	在池	皿2・内口皿1

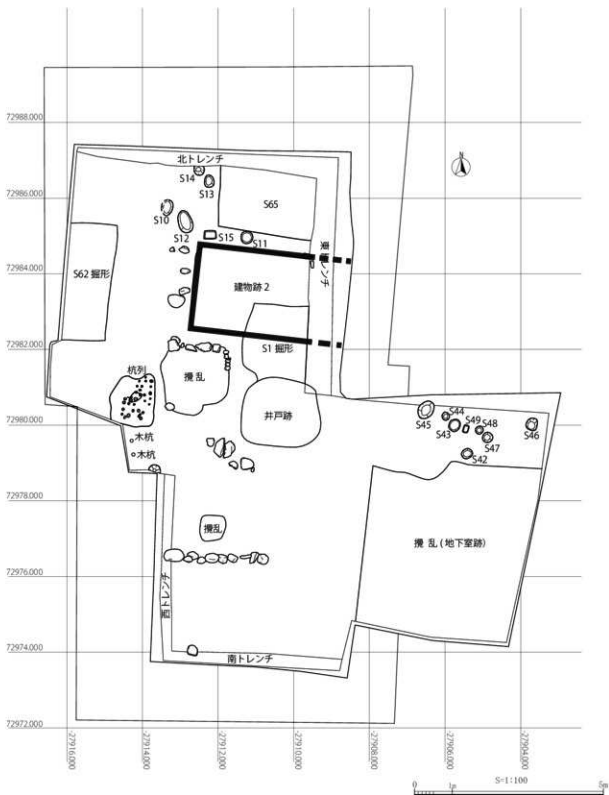
出土位置	種別	鑑定産地	器種・点数
2・3次面	陶器	肥前系	碗1
			瀬戸美濃系 碗1
			肥前系 不明1・器鉢1
	磁器	瀬戸美濃系	碗1
			不明1
	土器	在池	皿68・不明147・ササ1・滑石1
			肥前系 碗27・皿15・器鉢3・鉢1・袋物3・香炉1・不明12
	陶器	瀬戸美濃系	碗6・器鉢3・袋物1
			京管茶系 碗2
			瀬戸美濃系 皿2
不明 袋物1・土器1・不明17			
3次面	磁器	肥前系	碗33・小杯3・皿4・鉢2・蓋3・袋物7・香炉1・青磁1・白磁碗1・不明1
			瀬戸美濃系 碗2
	青磁	不明	碗3・鉢1
			瓦 不明 徳瓦10・古代瓦7
3次面下層	磁器	肥前系	皿1
			瓦 不明 火鉢2

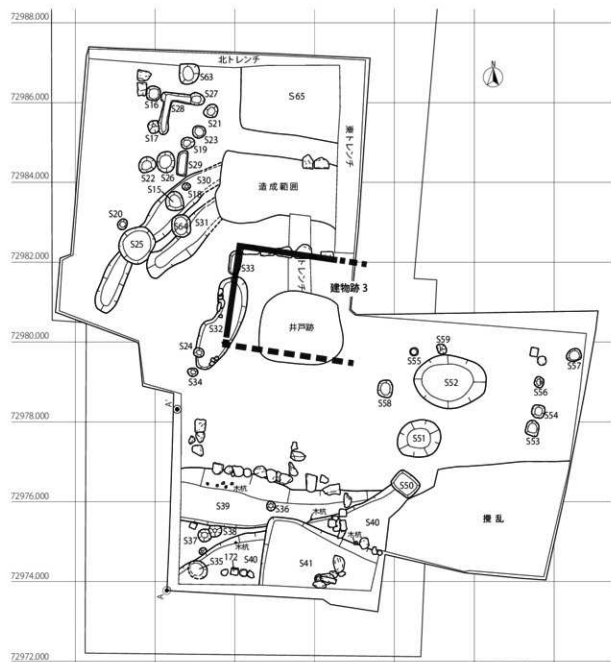
参 考 文 献

- 愛知県 2007『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世瀬戸系
- 江戸遺跡研究会 2001『図説・江戸考古学研究事典』柏書房
- 大橋康二 1988「18世紀における肥前磁器の銘款について」『青山考古』6号
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 小林計一郎 1994「古人の想いに包まれて」『藤屋御本陣』
- 板井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの』
- 全国シンポジウム実行委員会 2005『中世窯業の諸相へ生産技術の展開と編年へ 発表要旨集』
- 全国シンポジウム実行委員会 2005『中世窯業の諸相へ生産技術の展開と編年へ 資料集』
- 土岐市教育委員会 2006『窯々根窯発掘調査報告書』
- 水井久美男 2002『中世出土銭の分類図版』高志書院
- 長佐古真也 2012「消費地から見た瀬戸・美濃窯へご飯茶碗を中心に〜」『平成23年度財団法人瀬戸市文化振興財団シンポジウム 瀬戸美濃窯の近代一生産と流通〜』
- 長野市教育委員会 1998『長野遺跡群 西町遺跡』長野市の埋蔵文化財第87集
- 長野市教育委員会 2006『長野遺跡群 善光寺門前町跡』長野市の埋蔵文化財第115集
- 長野市教育委員会 2008『長野遺跡群 元善町遺跡 善光寺門前町跡(2)』長野市の埋蔵文化財第121集
- 長野市教育委員会 2014『長野遺跡群 善光寺門前町跡(3)』長野市の埋蔵文化財第135集
- 元善町誌編集委員会 1980『善光寺門前町百年の歩み 長野市元善町誌』
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 堀内秀樹 2010「都市江戸における貿易陶磁器の消費—江戸の需要とその背景—」江戸遺跡研究会編『都市江戸のやきもの』
- 水澤幸一 1999「瓦器、その城館的なるもの—北東日本の事例から—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集
- 宮田進一 1988「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号
- 村上伸之 1999「肥前における明・清磁器の影響」『貿易陶磁研究』No.19
- 室賀明 1984『八幡屋磯五郎の七味唐がらし』

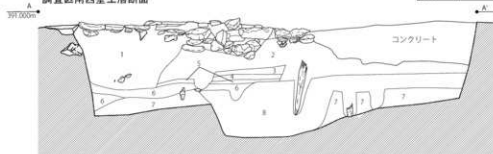
石列 1・2 土層断面







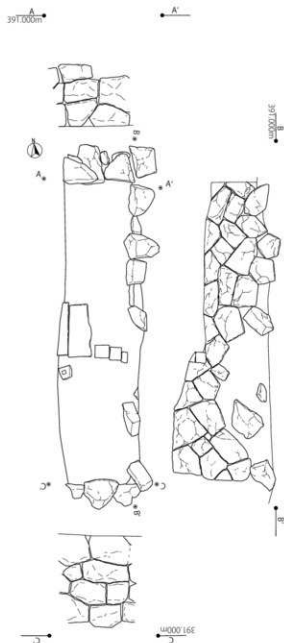
調査区南西壁土層断面



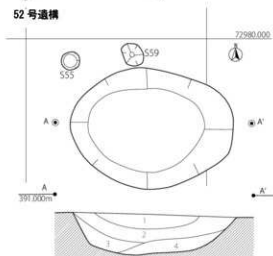
1. 暗褐色シルト質土・黄灰色砂・礫・炭化物・焼土粒混
2. 暗褐色土 炭化物・焼土粒混
3. 黄色砂質土・礫・炭化物・焼土粒混 (2次面)
4. 暗褐色シルト質土 炭化物混
5. 黄灰色粘質土・暗褐色土混 (3次面)
6. 暗褐色シルト質土 炭化物・暗色粘混
7. 茶褐色シルト質土・砂礫混 (中世)
8. 暗褐色シルト質土 灰色粘質土・黄色砂礫・炭化物・焼土混

0 10m S=1:40 10m

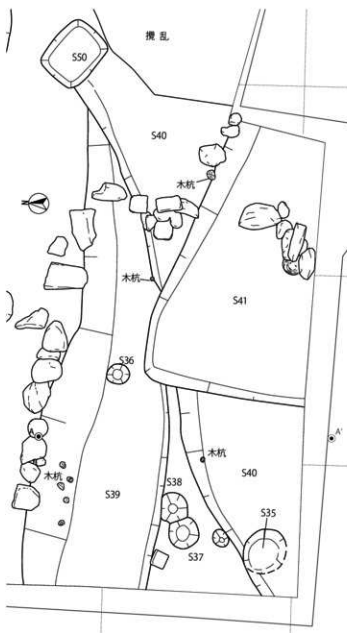
62号遺構



52号遺構



39・40号遺構

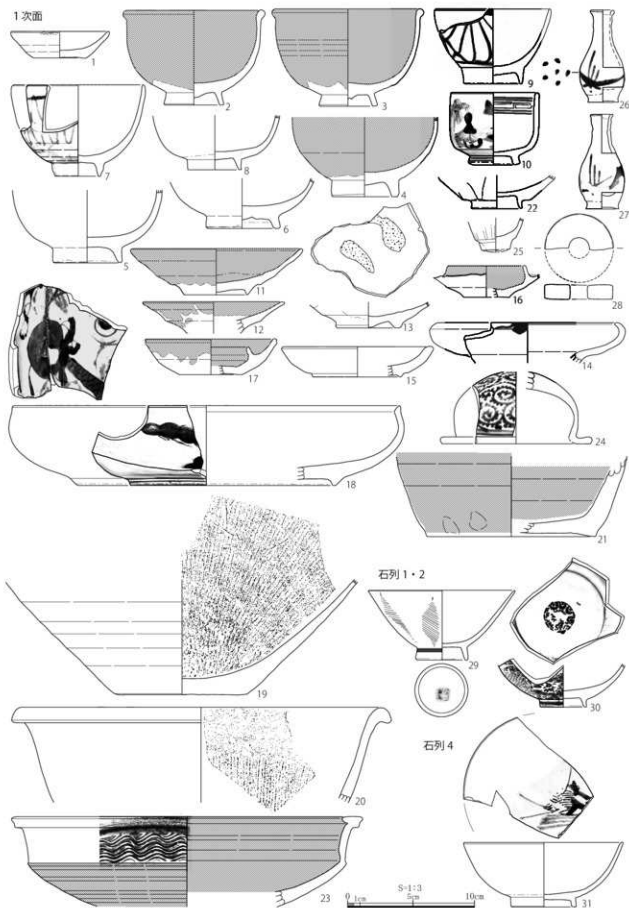


1. 暗褐色シルト質土 黄色砂多混、礫・炭化物・焼土少量
2. 暗褐色シルト質土
3. 灰色粘質土・白色砂質土層状体混
4. 暗褐色シルト質土 黄色砂多混、礫・炭化物・焼土少量

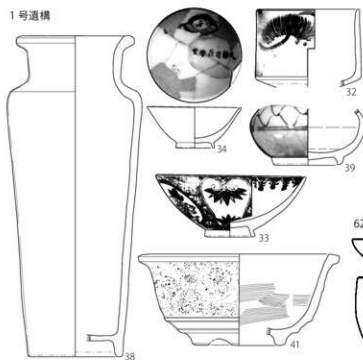
1. 暗褐色土 黄色砂・焼土・炭化物混
2. 炭化物層 焼土混
3. 焼土層 炭化物混
4. 暗褐色土 黄色砂・焼土・炭化物混

0 10cm S=1:40 1m

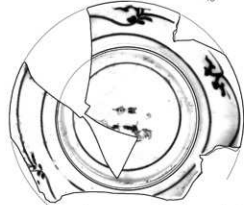
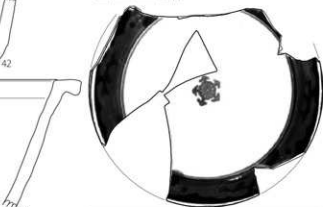
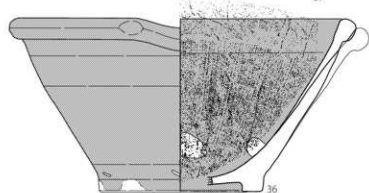
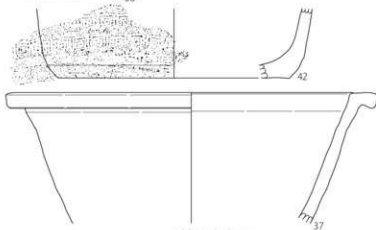
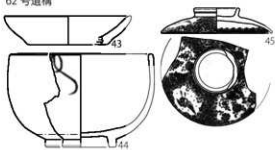
1次面



1号遺構

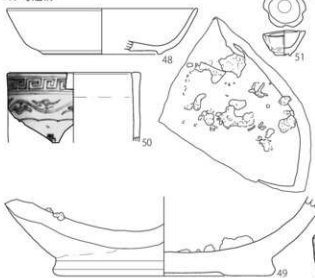


62号遺構

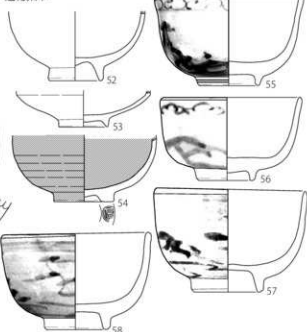


0 1cm 5cm 10cm
S=1:3

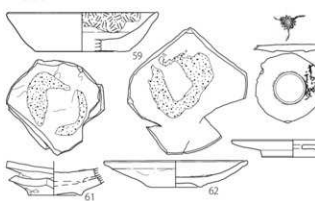
65号遺構



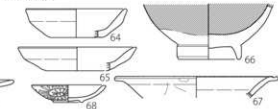
遺物集中



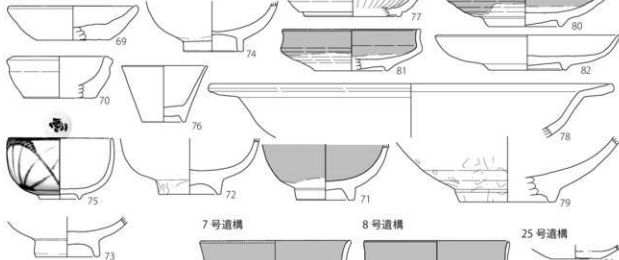
2次面



2・3次面



3次面



7号遺構

8号遺構

25号遺構

30号遺構

3次面下層

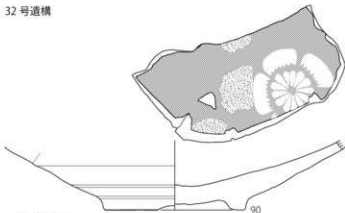


5:1:3
5cm 10cm

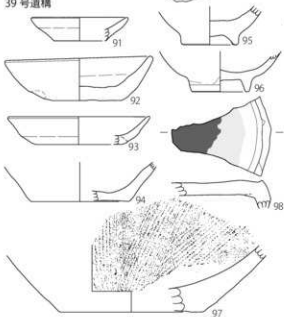
31号遺構



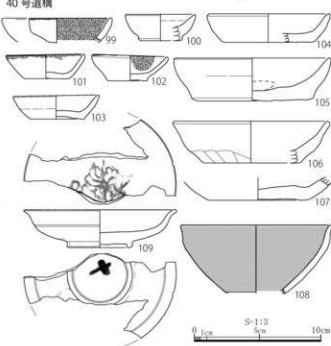
32号遺構



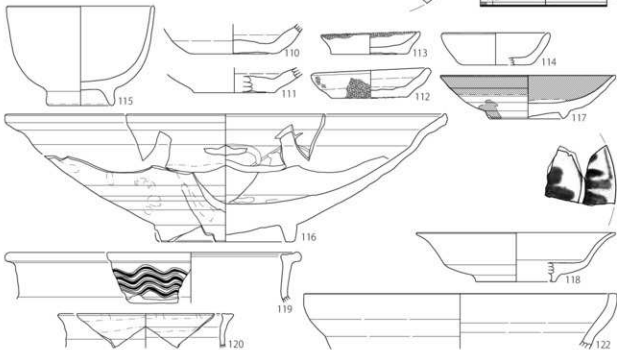
39号遺構



40号遺構

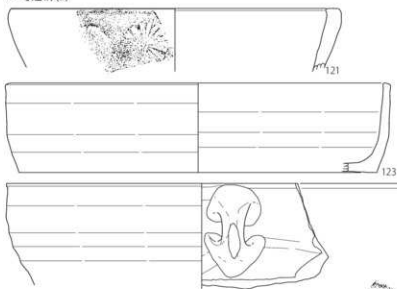


41号遺構 (1)

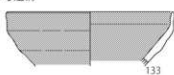


0 1cm 5cm 10cm
S-1:3

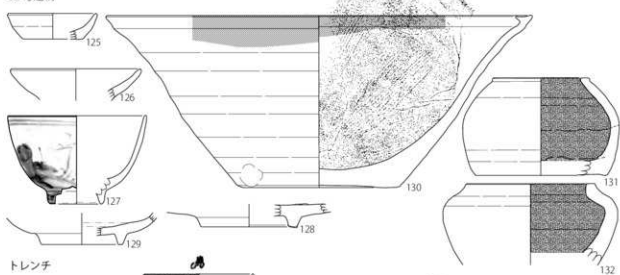
41号遺構 (2)



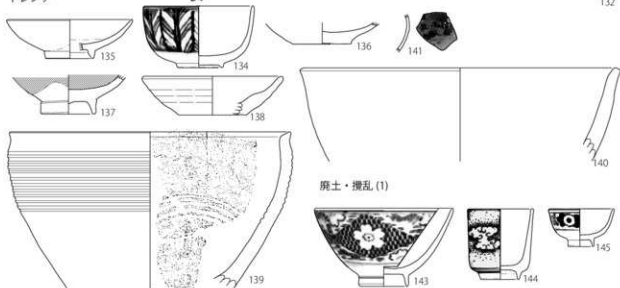
54号遺構



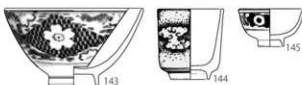
52号遺構



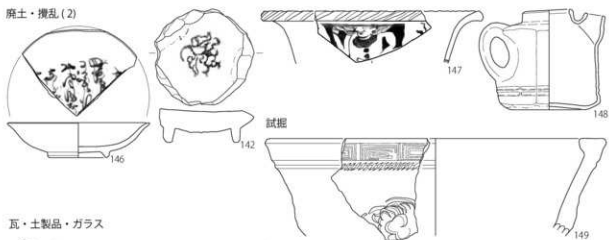
トレンチ



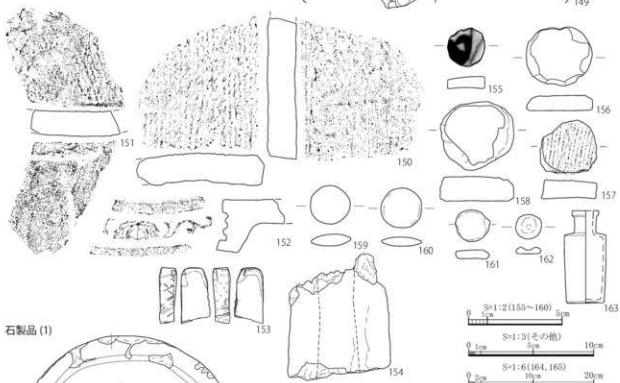
糜土・攪乱 (1)



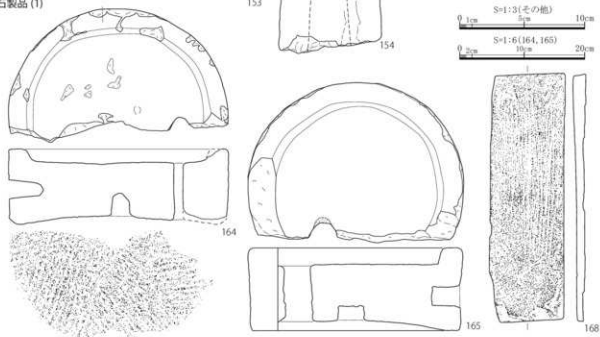
麻土・攪乱 (2)



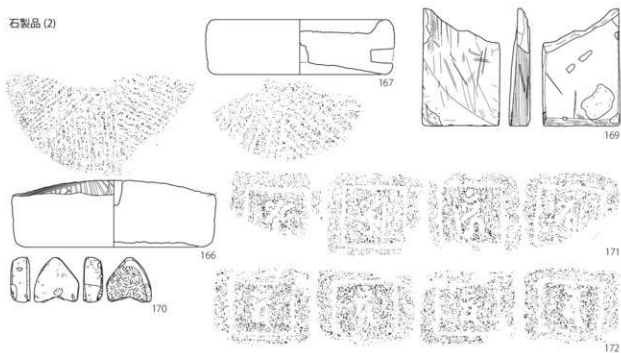
瓦・土製品・ガラス



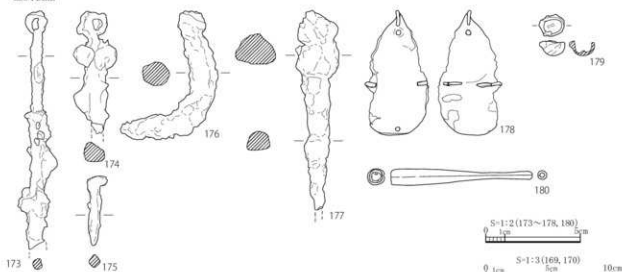
石製品 (1)



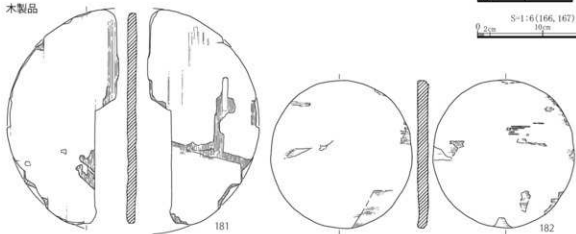
石製品 (2)



金属製品



木製品





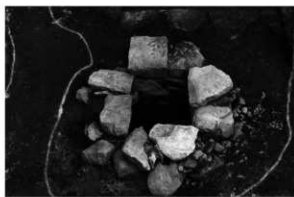
1次面全景 (南から)



2次面全景 (南から)



3次面全景 (南から)



井戸跡 (南から)



遺物集中出土状況



石列 1・2 (北から)



1号遺構完掘状況 (東から)



1号遺構土層断面 (西から)



杭列検出状況



1号遺構下層土層断面 (西から)



杭列土層断面 (西から)



62号遺構完掘状況 (北から)



39・40・41号遺構完掘状況（東から）



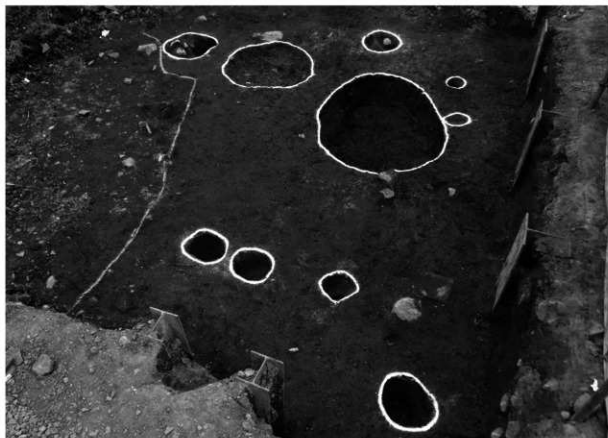
3次面北半遺構完掘状況（北から）



東調査区1次面全景（北東から）



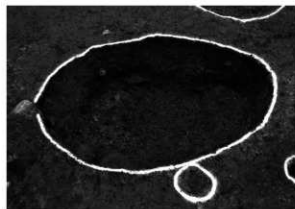
東調査区2次面全景（北東から）



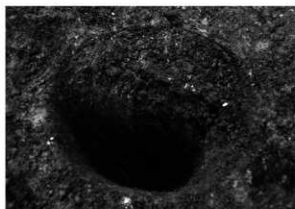
東調査区3次面全景(北東から)



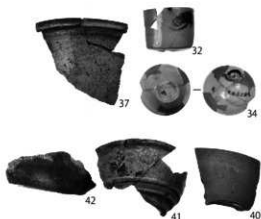
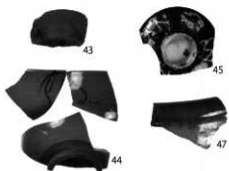
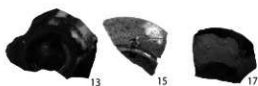
52号遺構土層断面(南から)

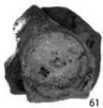
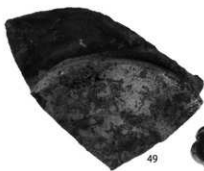


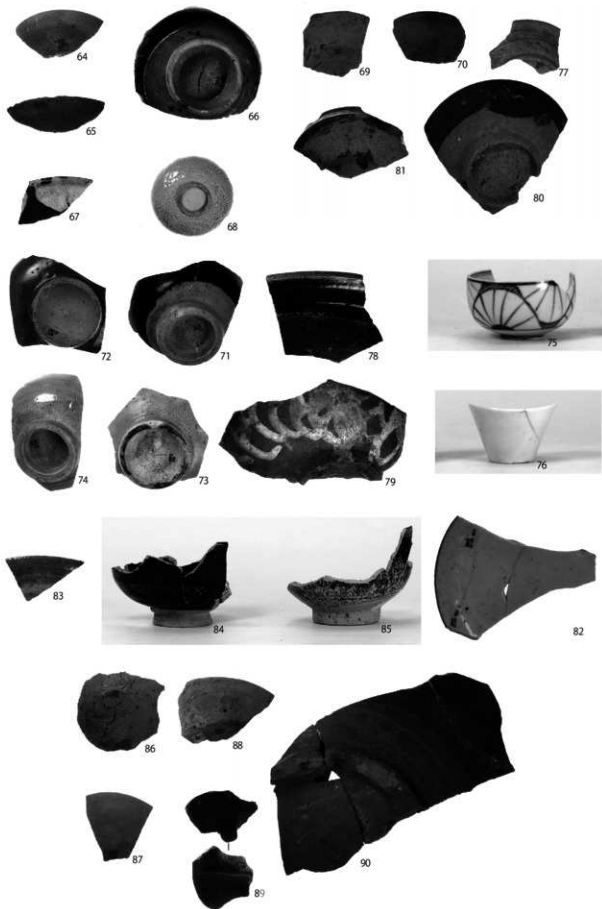
52号遺構完掘状況(北から)

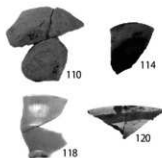
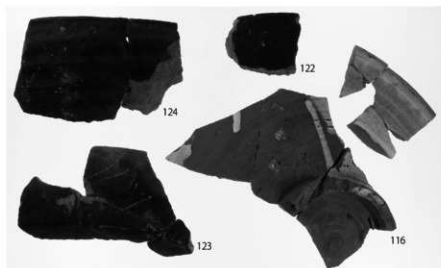
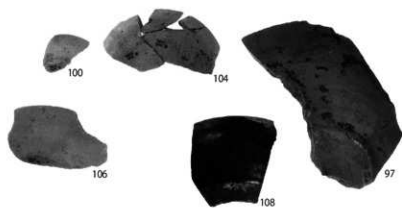
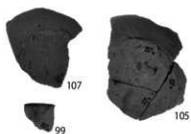
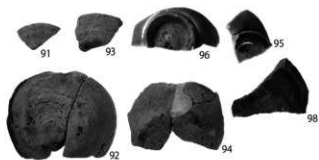


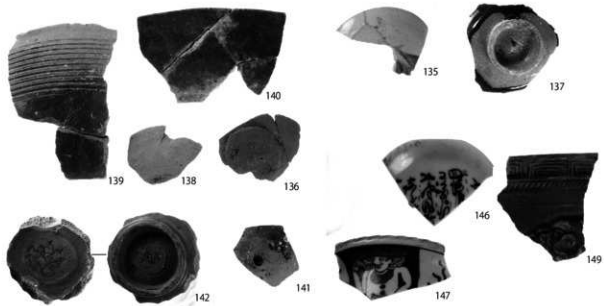
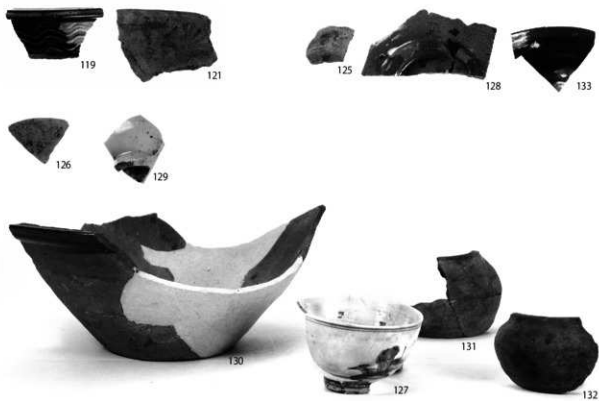
55号遺構土層断面(東から)

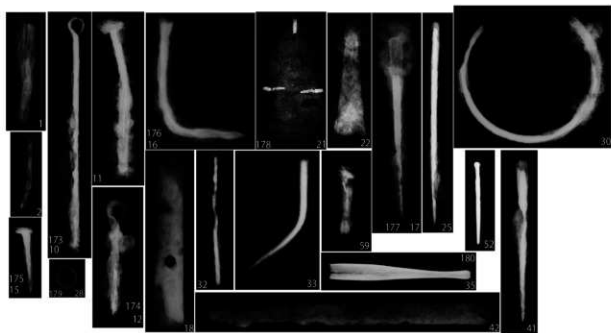
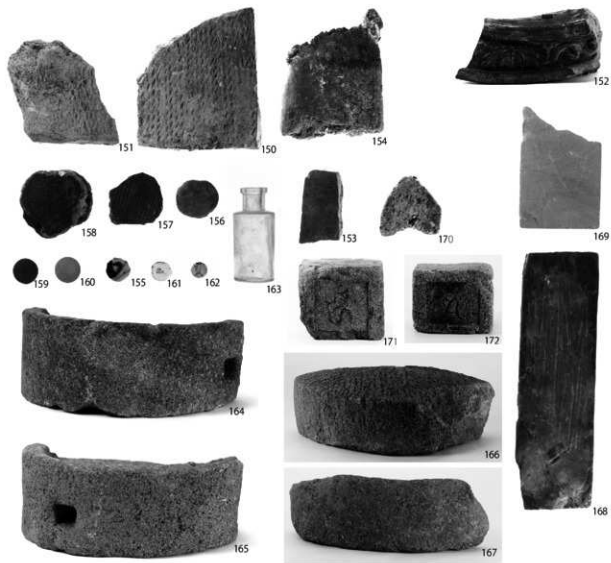


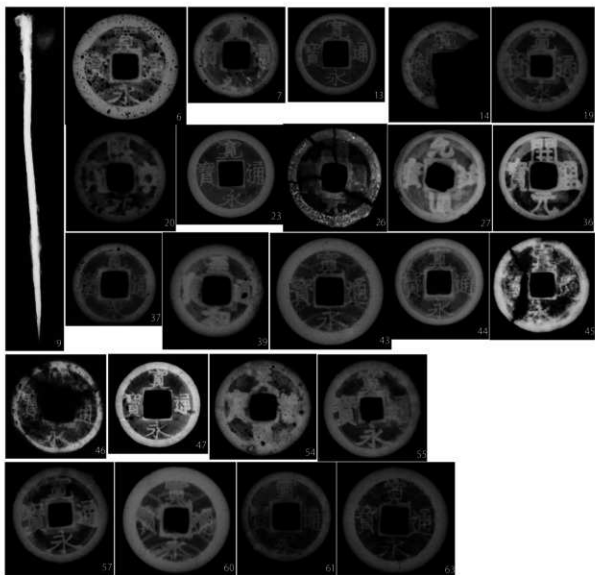












181



182

報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん ぜんこうじもんぜんまちあと							
書名	長野遺跡群 善光寺門前町跡(4)							
副書名	一八幡屋磯五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第142集							
編著者名	飯島哲也 田中曉徳							
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町 1414 番地 TEL 026-284-0004 FAX 026-284-0106							
発行年月日	2016(平成28)年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
善光寺門前町跡	長野県長野市長野市小島田町大門町 86-1 他	20201	C-018	36° 39′ 26″	138° 11′ 15″	20140417 ～ 20140603	120 m ²	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
善光寺門前町跡	集落跡	中世	溝・建物跡		陶磁器・土器皿・内耳鍋・瓦質香炉		中世末期～近世初頭の良好な遺物群	
		近世	溝・土坑・ピット・建物跡		陶磁器・土器皿・内耳鍋・金属製品・銭貨・土製品・石製品・木製品		弘化4年の大火の廃棄土坑	
		近代	石組溝・井戸・水場遺構 地下室・建物跡		陶磁器・ガラス製品・金属製品・土製品・石製品・赤色顔料		井戸と一体となる水場遺構 門前町の町割	
要約	善光寺門前町で参道と直交する横町通りに面する町屋跡の調査。中世～近代に亘る門前町の痕跡を検出した。中世では参道脇の南北溝に接続すると推測される15世紀の東西溝が検出された。各面に根石を基礎とする、重量建物跡が検出された。近世は3面の生活面が確認され、それぞれ17世紀代・18世紀代・幕末～近代の年代が与えられ、周辺の過去の調査と一致している。生活面形成は門前町の火災による整地が契機と推定される。							

長野市の埋蔵文化財第 142 集

長野遺跡群

善光寺門前町跡（4）

—八幡屋磯五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 28 年 3 月 17 日 印刷

平成 28 年 3 月 25 日 発行

発行 長野市教育委員会

編集 文化財課埋蔵文化財センター

印刷 法規書籍印刷株式会社

